

カルナとアルジュナ，そして『マハーバーラタ』研究のこれから：川尻道哉『カルナとアルジュナ—『マハーバーラタ』の英雄譚を読む』書評論文*

高橋 健二・川村 悠人

1 本稿の目的

本稿は、川尻道哉『カルナとアルジュナ—『マハーバーラタ』の英雄譚を読む』（勉誠社，2022年）に対する書評論文である。本書は、序論部と翻訳部から構成されており、序論部では『マハーバーラタ』およびカルナとアルジュナについて説明が与えられ、翻訳部では『マハーバーラタ』「カルナの巻」（第8巻）について上村訳では未訳であった部分が訳出されている。サンスクリット古典文学の邦訳が出ることは歓迎すべきであるが、本書の序論部・翻訳部ともに、著者の無理解や、根拠のない独断による間違いが多く見られ、さらに単純な誤植の類も非常に多い。そのため、本書が扱っている内容は『マハーバーラタ』の根幹に関わる部分であるにもかかわらず、本書は読者に混乱を与えるだけであるように思われる。

本書評では、序論部と翻訳部に分けて、修正すべき箇所を指摘する。ただし、修正を要する点は非常に多く、全てを論じることは不可能であったため、本書評で扱っていない部分が信頼に足るものであることを意味しない。序論部については、本書の叙述について評者と見解を異とする諸点を論じる。翻訳部については、翻訳の全体的な問題点を論じた上で（3.1）、第8巻49章25–34節、66章1–11節の川尻訳をサンスクリット原典と照らし合わせて検証し（3.2）、さらに第8巻のクライマックスとも言えるカルナ戦死の場面（66–67章）の評者による修正訳を提示する（3.3）。なお本書によって和訳された第8巻49–69章については、早急に修正版が用意される必要があり、評者二人にはその新訳を公表する準備がある。

本書評によって、現在の『マハーバーラタ』研究における研究水準を示し、将来のサンスクリット叙事詩研究に対する序説とする。本稿は高橋・川村の共同執筆によるもので、各担当箇所は以下の通りである。

高橋・川村共同担当箇所：1; 2.1–2; 3.1–3.3; 3.1.3–4.

高橋担当箇所：2.3–6; 2.8; 2.12; 2.19; 3.1.1–2; 3.2.1; 3.3.2; 4.

川村担当箇所：2.7; 2.9–11; 2.13–18; 2.20–22; 3.2.2; 3.3.1.

2 序論部

2.1 序論部全体について

本書の主眼である翻訳部の内容に直接的には関係ないと思われる叙事詩以前のインド思想について多くの紙幅が割かれており、序論部を構成する全5章のうち最長となっている。その内容は、本書で言及されている赤松 2018、早島ほか 1982、前田 2016の内容と比較して、特に新たな知見が提供されているわけでもない。そこに紙幅や労力を割くよりも、『マハーバーラタ』そのものや、本書の主題であるカルナとアルジュナにまつわる数々の話についてさらに広く、深く掘り下げるべ

*本稿を執筆するにあたって、石原美里氏より貴重な助言をいただいた。ここに記して謝意を表したい。また本稿は JSPS 科研費 22K19953, JSPS 科研費 21K12842 および東京大学潮田ヒューマニティーセンター公募研究 (A) の助成を受けたものである。

きではなかったかと思われる。以下では、本書の序論部について修正が必要な箇所についてテーマごとに論じる。

2.2 第 8 巻に関する先行研究

まず述べておくべきことは、『マハーバーラタ』第 8 巻の主題であるカルナとアルジュナ、あるいはアルジュナと行動を共にするクリシュナについて論じる海外の著名な研究書類が全く言及・参照されておらず、内容に新しさや豊かさが見られない点である。以下にいくつか代表的な先行研究を挙げる。まずカルナ研究について述べる。

- Shulman, *The King and the Clown in South Indian Myth and Poetry* (1985) の pp. 380–400 は、『マハーバーラタ』におけるカルナ像が後代の特に南インド文学の悲劇作品にどのような影響を与えたのかを論じている部分であるが、『マハーバーラタ』以降の南インド文学についての考察もさることながら、『マハーバーラタ』におけるカルナの悲劇性を考えるにあたって最も的確な解説を与えてくれている。
- Adarkar, *Karṇa in the Mahābhārata* (2001) は、カルナに関する博士論文である。Adarkar はカルナの特徴を選択することとして捉えることを提唱し、選択という観点からカルナにどのような勇猛さを読み取ることができるのかを検証している。
- McGrath, *The Sanskrit Hero: Karṇa in Epic Mahābhārata* (2004) は、種々の問題があるものの (cf. Adarkar 2005; Sullivan 2016: 170; 本稿脚注 1, 19), カルナを、アルジュナやビーシュマなどといった登場人物と比較することで、『マハーバーラタ』におけるカルナの人物像を立体的に描こうとしており、カルナという複雑な人物像を理解するには必須の研究書である¹。
- Bowles, *Mahābhārata Book Eight: Karṇa*, 2 vols (2006–2008) は Kinjawadekar 版に基づく「カルナの巻」の訳注研究であるが、その序論部においてカルナの性格やカルナにまつわる物語を概観しつつ、各場面の描写がもつ重要な意味合いを種々指摘しており、カルナ及び叙事詩の深い理解に資するものである。
- Köhler, “Karṇa and the Dharmik Evaluation of Character in the *Mahābhārata*” (2014) は、カルナが法（ダルマ）の観点から叙事詩においてどのように評価されているのかを論じた論考である。
- 前川輝光『マハーバーラタの世界』所収（2006）では、pp. 53–82 においてカルナについて論じられている。ただし本書は、主にサンスクリット以外の二次文献に基づいて、南アジア文化においてカルナがどのように受容されてきたのかを中心に論じているため、本書の提示するカルナ像は、必ずしも『マハーバーラタ』のサンスクリット原典において描かれているカルナの姿とは一致しないことには注意が必要である（本稿 2.19 節参照）。

次にアルジュナ・クリシュナ研究について述べる。アルジュナやクリシュナに関する研究は多岐にわたるが、比較的近年のもので、第 8 巻の読解に資するものとしては例えば以下がある。

- Katz, *Arjuna in the Mahabharata: Where Krishna Is, There Is Victory* (1990)

¹なお、カルナを他の登場人物との比較から描き出そうとする手法は、McGrath 2004 以前に出版された Adarkar 2001 にも見られるものであるが、McGrath 2004 では Adarkar 2001 の研究は言及されておらず、文献参照における不備であるように思われる。Adarkar 2001 は博士論文であり、一般書店では流通しないため McGrath は知らなかった可能性もあるが、Adarkar 2001 はマイクロフィルムとして UMI Publications に保存されており、申請すれば入手することができる。

- Viethsen, *Krishna Vāsudeva und die Schlacht auf dem Kurukṣetra: Eine textgeschichtliche Untersuchung zu den Büchern 6–11 des altindischen Epos Mahābhārata* (2008)
- McGrath, *Arjuna Pāṇḍava: The Double Hero in Epic Mahābhārata* (2016)

これらを読む余裕のない人にとっては Thite 編の *Mahābhārata—Cultural Index* (2019) が勧められる。同書では、原典の箇所を明示しながら 120 頁ほどでアルジュナの基本情報が論じられている。

2.3 『マハーバーラタ』の意味

本書 p. 4 では、『マハーバーラタ』(mahābhārata) は「直訳すれば『偉大なるバラタ族』となる」とある。しかし、「偉大なるバラタ族」という意味であれば、男性形が用いられることが予測されるが、mahābhārata という語は作中および写本等の奥書においては、中性単数の名詞として用いられているため、「偉大なるバラタ族」と解釈するのは文法的に不可能である。

なお、バラタ族・バーラタ族という表記の揺れについては、邦文の研究書類ではどちらの呼称を用いるかについて慣習は定まっておらず、二つの表記が用いられているが異なる部族を指すわけではない。本稿では一族名に言及する際にはその始祖となる人物の形容詞形 (bharata を始祖とする一族の場合は bhārata 「バーラタ」) を用いることにする。

bhārata という言葉が形容詞として用いられる場合、「バラタに関する」「バラタを始祖とする」という意味になり、バーラタ族を指す場合には、bhārata の男性形が用いられる。一方、bhārata 「バーラタ族」という形容詞をさらに形容詞化して、「バーラタ族に関する」という形容詞を形成することもできる。形容詞化が一度しか起こっていない形(「バーラタ族」「バラタに関する」と形容詞化が二度起こった場合(「バーラタ族に関する」と)とで、語形上の差異はないため、文脈やその形容詞がかかっている名詞から推測する必要がある。

『マハーバーラタ』本文では、mahābhārata は「バーラタ族の大 [戦争]」という意味と「バーラタ族の大 [物語]」という二つの意味で用いられている (Böhtlingk & Roth 1855–1875. V: 640–641)。前者の意味で用いられる場合には āhava 「戦闘」(MBh 5.139.56), yuddha (MBh 12.48.13) といった語と同格で用いられる。

mahābhārata という語の二番目の意味(「バーラタ族の大 [物語]」)に関連して、MBh 1.1.64 では、bhārata, もしくは bhāratasaṃhitā について以下のように説明されている。

MBh 1.1.64

caturviṃśatisāhasrīm cakre bhāratasaṃhitām |
upākhyānair vinā tāvad bhāratam procyate buddhaiḥ ||

彼(ヴィヤーサ)は、まず副次的な物語群を含まない二万四千詩節からなる『バーラタ・サンヒター』を著した。知者たちは[それを]『バーラタ』と呼ぶ。

bhāratam という中性形が用いられているが、MBh 1.53.32, 1.53.35, 1.56.1, 1.56.32 において ākhyānam 「物語」(中性)という語と同格で用いられていることから、bhāratam は「バーラタ族に関する」という意味の形容詞で ākhyāna 「物語」という語にかかっていると理解することができるだろう。現在の批判校訂版に見られる『マハーバーラタ』の詩節数は約七万五千詩節であり、MBh 1.56.13 では『マハーバーラタ』は十万詩節からなるとされている。MBh 1.1.64 で、『バーラタ』が二万四千詩節からなるとされるということは、mahābhārata とは、副次的な物語群を含んだ「バー

ラタ族の長大な物語」という意味で理解するのが妥当であると思われる²。なお、mahānt「偉大な」の語はバーラタ族に直接かけることは不可能であり、bhārataの語に想定されるākhyāna、もしくはそれに類する中性の「物語」を意味する言葉にかける必要がある³。

2.4 古典としての『マハーバーラタ』

川尻氏は「古典」としての『マハーバーラタ』について、「現代の細分化された学問とは異なり、古典は歴史も物語も宗教も区別せず、全てを等しく『法 (dharma)』や『伝承 (itihāsa)』として扱う」としているが (p. 8), そのような「古典」観の根拠は不明である。『マハーバーラタ』では、異なる学問体系が列挙され、論じられているところもあり (吉水 2022: 366–368, 382–385), 『マハーバーラタ』の時代にもすでに様々な学問体系があり、その違いが認識されていたことが分かる。また、『マハーバーラタ』の叙述の特徴としては、特定の事案について異なる視点から様々な解決策が提示されるものの、本文内ではそれらの解決策のうちどれが一番優れているのかが明記されない点が挙げられる (cf. Fitzgerald 2003; Takahashi 2021b: 270–281; 高橋 2023: 128–133)。それぞれの見解から物語を読むとそれぞれ違った『マハーバーラタ』像が浮かび上がるように設計されていると思われるところもあり、そのような解釈の重層性もまた『マハーバーラタ』の文学作品としても魅力である。したがって『マハーバーラタ』ではあらゆる学問体系が等しく法や伝承の名のもとで十把一絡げにされているというのは浅薄な『マハーバーラタ』観であるように思われる。

2.5 ヴィヤーサの出自

本書 p. 10 で川尻氏はヴィヤーサについて「そもそもヴィヤーサは本編において、カーリー女神が処女のまま生み、長じて一つのヴェーダを四つに分割したと言及される伝説的な人物であって、その実在は疑わしい。むしろしばしば物語中に現れてその知恵と聖なる力を発揮する超人的な聖仙として描かれている」と述べているが、この記述は混乱を招くものと思われる。

ヴィヤーサは、『マハーバーラタ』本編では、サティヤヴァティーがシャンタヌ王と結婚する前に産んだ子で、ドリタラーシトラ、パーンドゥ、ヴィドゥラの父親とされ、物語の中では主要な登場人物としての役割を果たしている。従って、『マハーバーラタ』本編において、ヴィヤーサはカーリー女神が産んだ子とされる記述は正確さを欠く。川尻氏が言及しているこの神話は『マハーバーラタ』において逸話として挿入されている一種の異説であって、『マハーバーラタ』の中心部分の編纂を担った作者 (たち) の見解を反映しているとは言えないだろう。

ヴィヤーサとは「編者」という意味で、古代南アジア世界ではいわゆる『ヨーガ・パーシュヤ』など、さまざまな作品がヴィヤーサに帰せられているが、それらの作品の著者としてのヴィヤーサは実在の人物でない可能性が高い。往々にして著者のヴィヤーサが、彼に帰せられる諸著作において何らかの決定的な役割を果たすことは少ない。しかし、『マハーバーラタ』では、ヴィヤーサはその著者でありながら、その作品の物語内においても重要な役割を果たすという興味深い特徴がある (cf. Sullivan 1990: 27–56)。

² 『バーラタ』と『マハーバーラタ』の関係は、様々な副次的物語がテキストに挿入されていった過程を示していると考えてほぼ間違いないだろう。『マハーバーラタ』は『ジャヤ (勝利)』とも呼ばれており、Dandekar 1954 は、『ジャヤ』から『バーラタ』、さらに『マハーバーラタ』へとテキストが肥大化していく過程で、テキストの性質が変化していったと論じている。『バーラタ』と『マハーバーラタ』については、何らかの編纂過程におけるテキストの変遷を示唆しているとするのは妥当な推論であると思われるが、Brockington 1998: 21 が批判しているように、『ジャヤ』と『バーラタ』もしくは『マハーバーラタ』については前後関係を証明する文献学的証拠に乏しく、少なくともテキストの呼称のみから三つの段階を想定するのは難しいと思われる。

³ もし「偉大なバーラタ族に関する物語」であれば、*māhābhārata という形になる。

2.6 śānta-rasa 「寂静の情趣」と『マハーバーラタ』

本書 (p. 13) では、『マハーバーラタ』以後の批評家たちは『マハーバーラタ』についてラサ論の観点から, śāntarasa 「寂静の妙味」が本質であると考えたと述べている。そして川尻氏は、『マハーバーラタ』は本来恋愛や恐怖など様々な要素を含んだ物語であるが, それを一つの形としてまとめるには, 最終場面で「戦場で駆け巡った勇者たちも皆死んで天界に赴く」という無常観に注目してまとめざるを得なかった, と考察している。この記述からは後代の詩論家たちは『マハーバーラタ』をそれぞれの文学論体系にあうように半ば強引な議論を展開しているような印象を与えてしまう。

川尻氏はここで上村 1992: 16 に言及しているが, 上村 1992: 16 は「後代の詩論家は, 寂静の情調 (シャーンタ・ラサ) が『マハーバーラタ』の主題であるとする」と述べているだけである。アーナンダヴァルダナは一つの文学作品には単一の主要な情趣があると考えていたため, 物語の結末部分から寂静の情趣が主要な情趣であるとしたわけではあるが (Tubb 1991: 175), 彼は『マハーバーラタ』に寂静の情趣以外の情趣もあることを認めていることは付け加えておくべきであろう (Tubb 1991: 186)。さらにアーナンダヴァルダナは自身の説を論証するにあたって, 『マハーバーラタ』の結末部分以外でも, 寂静の情趣の原因となる無常観がたびたび説かれていることに言及しており (Tubb 1991: 186), 機械的に物語の結末のみから寂静の情趣を主とすると考えているわけでもないだろう。『マハーバーラタ』と寂静の情趣の問題は, 古代南アジア世界において『マハーバーラタ』がどのように理解されてきたのか, また寂静を文学作品によって味わうことはどのようにして可能なのかといった古代南アジアの文学・哲学分野における重要な興味深い問題を孕んでおり, 詩論家たちの考察を一種の詭弁のように扱うのは不当な評価である。『マハーバーラタ』とラサ論については, Tubb 1991; 上村 1990: 211–216; 1999: 227–230 を, また最新のラサ論研究の概観については粟屋 2023 および辻 forthcoming を, それぞれ参照されたい。

2.7 ヴェーダの意味

古代ヴェーダ聖典を指す原語 *veda* の意味を川尻氏は「聞いたもの」とするが (p. 21), この訳語は普通ではない。このように訳す典拠も挙がっていない。動詞語根 *ved/vid* 「見出す, 知っている」から派生する名詞として, *veda* には「知識」という意味が想定されるのが一般的である。南アジア伝統では「[人々に ^{ダルマ}法と^{アダルマ}不法を] 知らせるもの」という語源解釈がされることがあるが⁴, いずれにせよ意味は「聞いたもの」ではない。

関連して川尻氏は, 「Śruti という語は, √śru 『聞く』という動詞の過去分詞 śruta の名詞形」と説明しているが (p. 54), 不可解な説明である。通常, śruti は語根 śru に接辞 *ti* が付されて派生される語形, śruta は同じ語根 śru に接辞 *ta* が付されて派生される語形である。もし, śruti を śruta から導く根拠があるのなら, 明示すべきである。

2.8 再生族

本書 p. 46 では, 四ヴァルナのうち, バラモン, クシャトリヤ, ヴァイシャについて「上位三階級のみが輪廻, 解脱を得るとされたので『再生族』 (dvija) という」という記述があるが, これは誤りである。上位三階級が「再生族」と呼ばれるのは, 母胎から生まれた後に, 学生期のはじめに入門式において, 師のもとで新たな象徴的な生を受けることによって「再び生まれる」からであって, 輪廻や解脱によって「再び生まれる」からではない⁵。この入門式は, 上位三階級のみ

⁴ *Sarvathānā on Bhāṭṭikāvya* 1.2 (I.3): vedayanti samyag jñāpayanti dharmādharmāv iti vedā ṛgyajuṣāmāni |

⁵ 入門式に関する包括的研究としては梶原 2021 がある。

許され、シュードラ等下位階級には認められていない。また、シュードラが輪廻転生することはない、と川尻氏は述べているが、管見の限り、南アジアの文献にはそのような概念は見出されない。『Mānavadharmaśāstra』（『マヌ法典』）9.335 では、上位三階級に従順に仕えたシュードラは死後上位三階級に生まれ変わるとされている⁶。また、シュードラ他、下位階級の者が解脱を得ることができるかどうかについては、南アジア諸哲学体系において様々な議論があり、一様にシュードラに解脱が不可能であるとされたわけではない⁷。

2.9 パンドウ王と鹿

パンドヴァ五兄弟の名目上の父であるパンドウ王は、狩りに出かけたとき、鹿に姿を変えていた聖仙キンダマを誤って射てしまう。その聖仙は鹿の姿をとって妻と情事をしているところだった。怒った聖仙に女性と交わると死ぬという呪いをかけられて、パンドウ王は女性と交われなくなる（MBh 1.109; 上村 2002–2005. I: 391–394）。

川尻氏はこれを「ある時パンドウ王は、妃マードリーが鹿に変身して交わっていた隠者を弓で射た。その隠者の呪いによりパンドウ王は妻と交われなくなった」と説明している（p. 61）。この記述によれば、川尻氏は、パンドウ王の妻の一人マードリーがあるとき鹿に変身してどこかの隠者と交わっていたと理解しているようだが、この場面にマードリーは出てこないし、鹿に変身してもいない。鹿に変身して交わっていたのは聖仙キンダマとその妻である。

2.10 神器パーシュパタ

英雄アルジュナはシヴァ神からパーシュパタ（pāśupata）という名の神器を授かる。これを川尻氏は「斧」と特定するが（p. 68）、原典にそのような特定を可能にする記述があるのかどうか不明である。神器類について原典箇所への提示とともに詳細な情報を載せる Mehendale 編の *Mahābhārata—Cultural Index* (1997) を見ても⁸、明らかに斧ではない。『マハーバーラタ』で使用される主たる武器は弓矢であり、神器の多くは、矢と合体させた上で弓によって放たれるものである（Whitaker 2000: 90; 川村 2023: 259）。パーシュパタもそのような使われ方をすることが作中では描写されている（MBh 8.24.115; Mehendale 1997: 114）。

2.11 カルナとアルジュナの戦い

川尻氏は、御前試合の際にカルナとアルジュナは合間見えたが戦いは行われず、「実際に二人が相まみえるのは、十数年後のクルクシェートラの戦いということになる」とするが（p. 84）、これは誤りである。実際には、カルナとアルジュナは大戦前にも対峙している。例えば、アルジュナがヴィラータ王宮に女性のふりをして身を潜めていたとき、カルナからカウラヴァの軍勢が攻め込んでくる。それをアルジュナが退散させてしまうわけだが、そのときカルナとアルジュナは対峙しており、カルナはアルジュナの力の前に退却を余儀なくされる（MBh 4.48–49, 4.55; 上村 2002–2005. IV: 558–561, 570–572）。

⁶ヒンドゥー教における下位階級の位置付けについては、山崎 1994、宮元 1994 を参照。

⁷アドヴァイタ学派におけるシュードラの解脱の可否を扱った研究としては Manabe 2018 がある。

⁸Mehendale 1997: 114–116. ただし、Mehendale はブラフマシラスとパーシュパタという二種の神器を混同した記述をなしているの、注意が必要である。

2.12 アルジュナは『マハーバーラタ』の主人公なのか

本書 pp. 84–85 では、物語においてたびたび語られるアルジュナの放浪が、物語構造における繁栄 → 戦争 → 死と解脱という図式とパラレルであると考えられるとし、「そうした意味でも、アルジュナは『マハーバーラタ』という物語の主人公なのである」としているが、アルジュナを主人公とする見解は、様々な問題を孕んでいる。アルジュナは『マハーバーラタ』において欠かすことのできない登場人物であることは確かであるが、主人公であるかといえばそうとも言い切れない。少なくとも最近の研究では、『マハーバーラタ』については、パーンダヴァ五兄弟の長兄ユディシティラを中心にその全体構造を読み解くというアプローチが主流になりつつある。

ユディシティラは、未曾有の大戦争を戦い、様々な人生経験をし、また様々な教訓を異なる人物から授かり、特にバラモンを中心とする世界観に基づいた法の支配を実現するが、その姿は、カリンガ国の征服後に戦争において人々を殺した罪悪感から、仏教・バラモン教が共存した形での法の支配を実現しようとしたアショーカ王を意識して描かれていると考えられている (Fitzgerald 2001; Sutton 1997)。『マハーバーラタ』の、特に編纂過程の後期に携わったバラモン階級に属する者たちには、ユディシティラへのバラモン教的教育と成長を描くことで、仏教の教えとそれに基づいた社会秩序のアンチテーゼとしてのバラモン教的世界観を当時の支配階級に頒布する意図があったと思われる。このような『マハーバーラタ』へのアプローチに与する必要は必ずしもないが、アルジュナが『マハーバーラタ』の主人公であるというのは軽率な叙述であったと思われる。

2.13 カルナとドゥルヨーダナ

川尻氏は、カルナは「窮地にあって自分を救ってくれたドゥルヨーダナへの恩を彼は生涯失わなかった」と述べているが (p. 88)、そうとは思えない場面が『マハーバーラタ』にはある。

例えばドゥルヨーダナたちが牧場視察を口実にパーンダヴァたちの有様を見物しにいかうとしたとき、ドゥルヨーダナの軍はガンダルヴァ族の軍と交戦になる。カルナはガンダルヴァたちの猛襲によって窮地に立たされると、ドゥルヨーダナやその軍隊はまだ退却していないのに、自分だけ逃げようとする (MBh 3.230.31)。「ドゥルヨーダナへの恩」をすっかり忘れてしまっているようである。その後、ドゥルヨーダナはガンダルヴァ軍に捕らえられ、あろうことかパーンダヴァたちに助けてもらうという屈辱を味わう。この「カルナ逃走事件」は、後に、ビーシュマやクリパまたはシャリヤによって非難される (MBh 3.241.6, 5.48.39, 7.133.16, 8.28.59)。

同じく川尻氏はカルナについて「ドゥルヨーダナらのパーンダヴァを侮辱したり陥れたりするような行いには、反対はせずとも積極的に関わることはなく...そこにカルナの人間性の一端を見て取ることもできるだろう」(p. 88)と述べ、さらにカルナには「生来の潔癖さ」があるとするが (p. 88)、これらの発言に対して明らかな反証となる諸例が『マハーバーラタ』には存在する。

例えば上述した牧場視察の場面において、パーンダヴァたちを物笑いの種にしに行くようドゥルヨーダナを焚きつけるのはカルナその人であり、そのための口実として「牧場視察」を考案してくるのもカルナである (MBh 3.226–227; 上村 2002–2005. IV: 187–191)。

また、少年時代にはドゥルヨーダナと共謀して、子供のパーンダヴァ五兄弟を殺そうと日々あれこれ試みていたようである (MBh 1.119.42)。五兄弟を不当に殺そうとする企ては、のちまで続く (MBh 1.129.2)。

決定的なのは、有名な賽子賭博の場面である。まず、カルナは、MBh 2.60.37–38 において、ドゥフシャーサナがドラウパディーを「奴隷女め」(dāsi) と呼ぶのを聞いてすこぶる喜び (atīva hr̥ṣṭah), 声をあげて笑い (hasan saśabdā), 誉めそやした (saṃpūjayām āsa) と語られる。また、カルナはドラウパディーを「売春婦」(bandhakī) と呼び (MBh 2.61.35)、生理中のドラウパディーが身に纏っていた一枚の衣を剥ぎとれとドゥフシャーサナに指示を出す (MBh 2.61.38)。さらにドラ

ウパディーをドゥフシャーサナと同じく「奴隷女」(dāsī)とも呼ぶ(MBh 2.63.1)。この場面を読めば、カルナがドゥルヨーダナらの悪事に自ら加担しているのは明らかであるし、精神性の高さや「生来の潔癖さ」などはとても感じられない。ちなみに、牧場視察の場面でカルナは「心の狭い者」(alpacetas)と語られている(MBh 3.225.31)。

2.14 アルジュナの気質

前節で例示したように、川尻氏には、カルナを「悲劇的な運命にも怯まず高潔に振る舞う誇り高き戦士」に仕立て上げようとする偏った傾向があるように思われる。「カルナの高慢な言動はしばしばシャルヤの諫めるところともなったが、その高慢さは自分の力への自負の表れであり、本来であれば御者に咎められる性格のものではない」(p. 90)といった根拠不明な発言もその一例である。

そのことに呼応して、アルジュナの気質を不当に下げようとする偏向もまた、川尻氏の記述には看取される。「一方でアルジュナは、『バガヴァッド・ギーター』にあるように同族同士の殺し合いに躊躇し、クリシュナに諫められた後でもしばしば戦いのさなかですら殺人をためらう甘さ、弱さを持ち」(p. 82)や「大事に育てられたゆえの甘さ、弱さをはらむアルジュナ」(p. 94)といった発言がその例である。

第一の記述において、人を殺めることの回避をアルジュナの「甘さ」や「弱さ」と断定する根拠は何であろうか。それは人間として当然の苦悩(赤松 2008)、またはアルジュナが備える戦士としての高潔さ、徳性とも理解できるものである。原典においてアルジュナの気質がどのように語られているかについては Thite 2019: 4–11 にまとめられているが、それを参照するとアルジュナの徳性や精神性の高さを語る描写こそあれ、人を殺めることに対するためらいを彼の「甘さ」や「弱さ」として語る描写は基本的にないことがわかる。

また、川尻氏の「しばしば戦いのさなかですら殺人をためらう」という発言がどの場面に言及しているのか不明だが、アルジュナは以下のような者は殺さないと原典では語られている⁹。

1. 眠っている者 (supta)
2. 注意のそれている者 (pramatta)
3. 武器を手放した者 (nyastaśāstra)
4. 手を合わせて懇願する者 (kṛtāñjali)
5. 逃げている者 (dhāvat)
6. 髪がばらけている者 (muktakeśa)

このような者を殺さないのは、彼の甘さや弱さではなくて、戦士としての高潔さ、徳性の現れではないだろうか。Dumézil 1958: 77 も、インドラ型の英雄であるアルジュナの特徴の一つとして「道徳的である」(moral) ことを挙げている。

川尻氏の第二の記述における「大事に育てられたゆえの甘さ、弱さ」についてであるが、まず、上述したようにアルジュナの気質を「甘さ、弱さ」と断定する根拠が不明である。次に、大事に育てられたから甘いと言うのなら、カルナもアディラタとラーダーによって大事に育てられたのではないだろうか。

⁹MBh 10.8.118c-f: na ca suptaṃ pramattaṃ vā nyastaśāstraṃ kṛtāñjalim | dhāvantaṃ muktakeśaṃ vā hanti pārtho dhanamjayah ||

2.15 神器ブラフマシラス

川尻氏はアルジュナが保有する神器ブラフマシラス (brahmaśiras) 「梵天の頭」に触れている。それをシヴァ神から授かったものであることを述べた上で、そのブラフマシラスは「アシュヴァッターマンとの戦いにおいて発動しかけるがすんでのところで回収される」と説明する (pp. 84–85)。ここには、二つの誤りがある。

まず、アルジュナが保有するブラフマシラスには二種ある。一つはシヴァ神から授かるもの、もう一つは武芸の師ドローナから授かるものである¹⁰。クリシュナがアルジュナにブラフマシラスを発動するよう指示する際、クリシュナは「ドローナから教えられた神的なアストラ」(divyam astram . . . droṇopadiṣṭam) を使うよう述べていることから、アシュヴァッターマンに対抗してアルジュナが発動するのはドローナに授かった方のブラフマシラスである (MBh 10.14.2; Katz 1991: 132, n. 4)。

次に、上述のごとく川尻氏はブラフマシラスが発動寸前で止められたと述べているが、実際にはアシュヴァッターマンもアルジュナもそれを放っている、すなわち発動させている。そこに聖仙ナーラダとヴィヤーサがやってきて止めようとしたので、アルジュナは一度放ったブラフマシラスを引き戻す。この「一度放たれたブラフマシラスを引き戻す」のはアルジュナにしかできない芸当だったわけである。MBh 10.14.7–16 を見れば、解き放たれた二人のブラフマシラスが今にも世界を焼き尽くし、破壊しそうになっている様子がはっきりと描かれている。

関連して、川尻氏は「アルジュナはいわば神々に愛され、ガンディーヴァやブラフマシラスを『無償で』得ているのに対し、カルナは『交換』で、しかも制限の多い槍を得ている」とするが (p. 89)、アルジュナとカルナの状況を恣意的に差異化しすぎであるように思われる。

まず、ブラフマシラスの獲得の前段階として、アルジュナは四ヶ月にわたる苦行を行っており、その後、シヴァ神との激戦を経てその力を認められた上でブラフマシラスを授かるのである（しかも一度、肉団子のようにされている）。このような過程を経るブラフマシラスの獲得が、はたして無償と言えるのだろうか。

次に、川尻氏はカルナの神槍を「制限の多い槍」として、アルジュナが授かったブラフマシラスと差異化しているようだが、制限ということなら、ブラフマシラスにも厳しい制限がある。「動・不動のものよりなる三界において、このアストラが打ち殺せぬものは決してない」(avadhyo nāma nāsty asya trailokye sacarācare) と言われるブラフマシラスであるが (MBh 3.41.16)、この神器は同時に、それを人間相手には使ってはいけないという厳しい制約をもつ (MBh 1.123.75, 3.41.15)。一撃必殺のカルナの神槍も、使えるのは一度、使える相手も一人だけという制限をもつが、人間相手、つまりアルジュナ相手にも使えるという点では、ブラフマシラスよりも有利であるという見方もできる。だからこそ、策士クリシュナはカルナに強力な戦士ガトートカチャを前もってぶつけ、神槍をそこで使わせようと企図したのである。そしてその作戦は成功する¹¹。

2.16 アルジュナの異名

川尻氏は「アルジュナには十の異名があり、場合によって呼び分けられている」(p. 86) とし、アルジュナがウッターラ王子に告げた 10 の異名を載せている (pp. 86–87)。この記述だけを見ると、まるでこれらがアルジュナの異名の全てであるように読者が理解してしまう恐れがある。実際には

¹⁰ ドローナから授かることが描かれるのは、王子たちの武術訓練を主題とする MBh 1.123 であるが、上村訳ではこの 123 章全体が省略されている。

¹¹ なお、カルナの神槍の名としては「槍、投槍」を意味する一般名詞シャクティ (śakti) が普通だが、バーサの戯曲『カルナの重荷』では、「『無垢』という名の投槍」(vimalā nāma śaktiḥ) と固有名が付いており、カルナが念じたとき手元に出現するようである (Karnabhāra p. 84, lines 1–7)。

これら以外にも、パールタ「プリターの子」(pārtha) やカウンテヤ「クンティーの子」(kaunteya) など、実に多くの異名がアルジュナにはある。特に、「ガンディーヴァ弓の保持者」(頻出する表現は gāṇḍīvadhanvan) はアルジュナを特徴づける神弓ガンディーヴァの名を冠した異名であるから、言及すべきだったように思われる。Thite 2019: 76–119 には、異名も含め、アルジュナに言及する『マハーバーラタ』中の表現が網羅されている。Katz 1990: 277–292 ではアルジュナの異名が数多く列挙され、その意味合いが詳細に論じられている。

2.17 カルナの蛇矢

川尻氏は、カルナの最後を語る中でカルナの必殺／必中の矢が不発に終わったことを述べているが (p. 70, p. 91), 説明がないため、この「必殺／必中の矢」が何を指すのかが不明瞭である。おそらく MBh 8.66.5 以降で描かれるカルナの蛇矢を指していると思われるが、説明がないと、読者が話を追うのは極めて難しい。

火神アグニの要請を受けてアルジュナがクリシュナとともにカーンダヴァの森を焼いたとき、竜王タクシャカの子アシュヴァセーナは母親を殺されながらも、なんとか何を逃れる (MBh 1.218–219; 上村 2004–2005. II: 213–219)。カルナが放った矢は、アルジュナに恨みをもつこのアシュヴァセーナが姿を変えたものであった¹²。MBh 8.5.105ab において、カルナの蛇矢は「蛇の顔をした最高峰の神聖な大矢」(sarpamukho divyo mahesupravarah) と言われている。その必殺の毒矢を危険と見てとったクリシュナは戦車を強く踏みつけてアルジュナの位置をずらし、アルジュナの冠を割らせるにとどまらせる (MBh 8.66.10–11)。その後、アルジュナはその蛇アシュヴァセーナを殺す (MBh 8.66.24)。

2.18 カルナの受けた呪詛

カルナ敗北の要因の一つである車輪が埋まったことについて、川尻氏はそれをカルナの不幸や不運として記述している。「戦車の車輪が穴にはまるなどの不幸に見舞われる」(p. 70), 「戦車の車輪が地面にとらわれるなどの不幸に会い」(p. 91), 「不運に見舞われなかったら」(p. 241), といった記述がそれである。確かに MBh 8.66.43 では「悪運、不運」(vyasana) という表現が用いられているが、いずれにせよ、車輪が大地に沈むのはあるバラモンの呪詛が実現した結果である。カルナを扱う書であるにもかかわらず、この重要なバラモンの呪詛について説明がなされていないのは、本書の大きな不備の一つと言わねばならない。

カルナはかつて御者の身分をバラモンだと偽って聖仙ラーマ・ジャーマドグニヤ (本稿では呼称「パラシュラーマ」を用いる) のところに弟子入りしていた。梵天のアストラ (brahmāstra) という神器を獲得するためである。この弟子入り期間中にカルナは二つの呪いをかけられる。一つ目はあるバラモンの仔牛を射殺してしまったとき、憤慨したそのバラモンから受けた以下の呪いである。

MBh 8.29.31

śvabhre te patatāṃ cakram iti me brāhmaṇo `vadat |
yudhyamānasya saṃgrāme prāptasyaikāyane bhayam ||

¹²Mehendale 1997: 4 は、カルナが放った矢に蛇が乗っていたと解しているが、批判校訂版では採用されていないものの、写本 Dn1 T2 K4 V1 B1–5 D1–8 において挿入されている詩節群 (1106*) から、蛇は自ら矢の姿 (iṣurūpa) を取ることができることがわかる (Hiltebeitel 2007: 67, n. 117)。

バラモンは私に宣告した:「汝が戦っている最中, 汝の一つの車輪が穴に落ちるべし. 汝は戦いの中で集中していた [心] に恐怖を抱くことになる。」¹³

カルナはバラモンを何とかなだめようとするも, バラモンからは「御者よ, われが発したことは実現する. 変更はきかぬ」(MBh 8.29.37cd: *vyāhṛtaṃ yan mayā sūta tat tathā na tad anyathā*) と絶望的な一言を告げられる¹⁴. かくしてカルナが乗る戦車の車輪はアルジュナとの戦いの最中, 大地に飲み込まれてしまう.

もう一つは, 自らの身分詐称が明るみに出たとき, 師である聖仙パラシュラーマから受けた以下の呪いである.

MBh 8.29.6cd-7ab

sūtopadhāv āptam idaṃ tvayāstraṃ na karmakāle pratibhāsyati tvām ||

anyatra yasmāt tava mṛtyukālād abrahmaṇe brahma na hi dhruvaṃ syāt |

「御者よ, 汝は詐術を用いてこのアストラ (梵天のアストラ) を手に入れた. いざ事をなそうとするとき, それは汝に閃き出ないであろう. 汝が死ぬ時以外にのみ [それは閃き出る]. 実にバラモンでない者のもとで梵天 [のアストラ] が確固として存立することなかれ。」¹⁵

かくして, カルナはアルジュナとの交戦中, 突如として梵天のアストラを出すことができなくなる. このカルナによる身分詐称は前述した川尻氏の「生来の潔癖さ」という発言に反する一例でもある. また, この身分詐称は聖仙を憤慨させる結果を招いており, 別頁における川尻氏の「カルナ自身に『法』を守らないという意味での倫理的問題があるわけではない」という発言 (p. 82) に対する反例でもある¹⁶.

2.19 カルナが耳環と鎧をインドラに渡したのは, 純粋な施与行為と言えるのか

川尻氏は「カルナの誓いは『与えるもの』であり, アルジュナのそれは『奪われぬもの』である」(p. 92) と述べている. バラモンに請われたものはなんでも与えるという誓いを立てていたカルナに対して, アルジュナの父であるインドラはバラモンに扮してカルナを訪れ, カルナを不死身の存在にしていた耳環と鎧を奪うというエピソードを川尻氏は意図していると思われるが, このエピソードにおいてカルナは単純に「与える」だけの存在ではないことに注意が必要である. カ

¹³この呪詛は第 12 巻では次のように語られている. MBh 12.2.24: *yena vispardhase nityaṃ yadarthaṃ ghaṭase 'nīsam | yudhyatas tena te pāpa bhūmiś cakraṃ grasiṣyati ||* (「汝が常に張り合い, その者のために夜を徹して修練を積んでいる者, そのような者と汝が戦っている最中, 罪深き者よ, 大地が汝の一つの車輪を飲み込むであろう.」)

¹⁴第 12 巻では次のように言われている. MBh 12.2.28ab: *nedaṃ madvyāhṛtaṃ kuryāt sarvaloko 'pi vai mṛṣā |* (「世界のどんなものも, われが発したこの言葉を無効化することはできぬ.」)

¹⁵当該箇所解釈については, 最も妥当と思われる Bowles 2006: 421 の理解を重視した (詳細については別稿を予定). この呪詛は第 12 巻では次のように語られている. MBh 12.3.30-31: *yasmān *mithyopacarito astralobhād iha tvayā | tasmād etad dhi te mūḍha brahmāstraṃ pratibhāsyati || anyatra vadhakālāt te sadṛṣena sameyuṣaḥ | abrahmaṇe na hi brahma dhruvaṃ tiṣṭhet kadā cana ||* (「汝はここでアストラを欲しがらぬあまり人道を踏み外した. ゆえに, 愚かなる者よ, 汝のこの梵天のアストラが汝のもとに閃き出るのは, 好敵手と交戦中に汝が討たれるとき以外である. 実にバラモンでない者のもとでは, 如何なるときも梵天 [のアストラ] が確固として存立することなかれ.」) *mithyopacarito は *mithyopacaritam* とした方が読みやすいが, 原典のまま読む場合は *upacaritaḥ* の目的語として何かしら男性形の語 (例えば *arthaḥ* 「事」) を補って解する必要がある.

¹⁶Bowles 2006: 23 もカルナの性格を描く中で「道徳上の諸欠点」(moral shortcomings) という表現を用いている.

ルナはインドラがバラモンに扮していることを見抜いており、それゆえ「私が見返りなくあなたの願いをかなえることは道理にかないません」（上村 2002–2005. IV: 408: 295; MBh 3.294.14）と言って、インドラに一発必中の槍を要求する。請われたものはなんでも与えるという布施の精神は『マハーバーラタ』でもたびたび称賛される美德の一つである。ここでも、カルナが耳環と鎧を自身の体から切り分けたとき、天から花の雨が降ったとされるから（MBh 3.294.37）、カルナの施与行為は称賛されるべき行為とされていることがわかる。

しかし、施与行為に関する『マハーバーラタ』における他の逸話と比較すると、「与える」というカルナの誓いは徹底されたものではないように思われる。なぜなら、通常は相手に対して何らかの「見返り」を求めるようなことはしないからである。例えば、MBh 3.245–247では以下のような物語がある。落ち穂拾いで生活するムドガラというバラモンが、妻子と共にクルクシェートラに住んでいた。そこにドゥルヴァーサスが訪れ、ムドガラが落ち穂拾いで集めた食糧を、ムドガラの分だけでなく、彼の妻子の分まで全て食べてしまうが、ムドガラは全く怒りなどを見せない。それが何回か繰り返された後、ドゥルヴァーサスはムドガラの布施の徳を称賛する。なお、その後、ドゥルヴァーサスはムドガラを天界へと誘おうとするが、ムドガラは天界の使者に天界の欠点を尋ね、天界の生活はいつか善業の果報が尽きると終わるということを知り、最終的にはヨーガによって涅槃に到達する¹⁷。

ムドガラの無条件の施与に比べると、カルナがバラモンに扮したインドラに耳環と鎧を与えた行為は完璧なものとは言えない。カルナが完全無欠の施与行為をおこなっている必要もなければ、『マハーバーラタ』本編ではカルナの施与行為が、他の徹底した施与行為と比較されているわけではない。川尻氏のようにカルナが「与える」誓いを敢行したと考えるのであれば、『マハーバーラタ』において語られるそのほかの施与行為と比べて、カルナの施与行為がどれほど英雄的で特筆すべきなのかを綿密に分析する必要がある。なお前川 2006: 76–79 はカルナを「施しの英雄」(daanveer)としているが、この説にはいくつかの問題がある¹⁸。daanveer という語はヒンディー語で、サンスクリット語の dānavīra に相当すると考えられるが、『マハーバーラタ』には dānavīra という語は現れず、カルナが『マハーバーラタ』において「施しの英雄」とされているとする説には疑問が残る¹⁹。しかし、南アジア文学におけるカルナの人物像を dānavīra とする説には、根拠がないわけではない。演劇指南書 *Nāṭyaśāstra*（『演劇論書』）では、勇猛の情趣は、作品の主人公が「施与の英雄」(dānavīra)、「法の英雄」(dharmavīra)、「戦闘の英雄」(yuddhavīra) のいずれかによって三種に分類されるとしている (*Nāṭyaśāstra* 6.49)。後代の詩論家ジャガンナータは、施与の英雄の例としてカルナを、法の英雄の代表としてユディシティラを、そして戦闘の英雄としてのラーマをそれぞれ挙げている (Masson & Patwardhan 1970. II: 93, n. 486)。カルナが南アジア文学史上いつ頃からどのようにして dānavīra として表象されるに至ったかについてはより詳細な研究が必要であるように思われる。

¹⁷ここでは天界を得るための修行と涅槃を得るためのヨーガとが対比されているようであるが (Fitzgerald 2010: 81–82), Takahashi 2021b: 273–274 で指摘したように、ムドガラが天界の欠点を尋ね、ヨーガによって涅槃に達成するという部分は、後に追加されたものである可能性が高い。

¹⁸カルナを「施しの英雄」と解釈することの問題点については石原美里氏よりご教示をいただいた。

¹⁹また McGrath 2004: 3 はカルナの異名の一つである vasuṣena 「財物をその軍隊とする」が、彼の気前よさを表すとしている。カルナがそのように命名されるのは、「アディラタとラーダーに拾われる時であるが、二人は「この子は財宝 (vasu) とともに生まれた」から vasuṣena と名付けたとされている (MBh 1.104.15)。上村 2002–2005. I: 384 は、ここにおける「財宝」とは彼の耳輪と鎧を指していると解釈している。MBh 3.293.12 では、バラモンたちが、カルナが生まれながらにして黄金の鎧と耳飾りを身につけているのを見て、彼に vasuṣena という名前を与えたとされており、上村の解釈が妥当であると思われる (ただし、MBh 1.104.15 と MBh 3.293.12 とでは、この名前を与える者が誰であるかという点について相違があることには注意が必要である)。したがって、vasuṣena という異名に気前の良さが含意されているという McGrath 2004: 3 の解釈は支持できない。

例えば、バーサ²⁰作の *Karṇabhāra* 『カルナの重荷』²¹は『マハーバーラタ』のカルナの物語を題材にした戯曲であるが、そこではカルナは「施与の英雄」としての特徴が強まっている。『カルナの重荷』においては、バラモンに扮したインドラに布施を求められたカルナは、インドラに対して見返りを求めることはなく、自ら耳環と鎧をインドラに与えようと申し出る。そして、カルナから耳環と鎧を奪ったことを悔やんだインドラは、カルナにその代償として必中の武器を授けるとされる。当作品におけるカルナは、見返りを求めない布施を実行する「施与の英雄」の理想を体現していると言えるだろう (cf. Panikkar 1990: 198)。

以上のことは『マハーバーラタ』におけるカルナが、「施与の英雄」でないことを示すわけではない。しかし、バーサがカルナを、見返りを求めない「施与の英雄」とするために『マハーバーラタ』の物語を改変したという事実は、まさに見返りを求めている点においてカルナが十全な意味で「施与の英雄」としては受け入れ難いと考えられていたことを示唆する。カルナは『マハーバーラタ』では、完全に「施与の英雄」でもなければ、完全な悪人でもなく、複雑な性格を有する人物として描かれているように思われる。

2.20 カルナとアルジュナの神話的背景

カルナは太陽神スーリヤの子、アルジュナは武勇神インドラの子である。川尻氏は、カルナとアルジュナの作中でのあり方を、彼らの父神の違いの観点からも論じている (pp. 93–94)。

川尻氏は触れていないが、『リグヴェーダ』 (*R̥gveda*) ではインドラ神が太陽神スーリヤの車輪の一つを盗んだり、引きはがしたり、押しつぶしたりすることが語られている²²。太陽神スーリヤの子であるカルナが乗る戦車の車輪の一つが地面に飲み込まれ、カルナが武勇神インドラの子であるアルジュナによって討たれるところに、このようなヴェーダ時代の神話の跡を見ることができ (Greer 2002: 128)。Dumézil 1954: 65 は「古神話を地上界の出来事として置き換えること」(‘la transposition terrestre du vieux mythe’) と表現している。武勇神インドラについては豊富な神話が『リグヴェーダ』において語られる一方、太陽神スーリヤについて『リグヴェーダ』で語られる神話はこれのみである (Dumézil 1954: 62)²³。『リグヴェーダ』に言及するのなら、このよく知られた神話にも言及すべきであったと思われる。

2.21 カルナと太陽

川尻氏は太陽の性格に当てはめてカルナのあり方を論じる中で、「リグ・ヴェーダで最も多くの讃歌を捧げられる不敗の戦神であるインドラに対して、太陽はインドの風土においてしばしば苛烈に過ぎ、必ずしも豊穡や安寧を約束しない」とする (p. 93)。太陽にそういう面はあるかもしれないが、太陽の性質を云々するためには、まずもって『マハーバーラタ』内で太陽がどのようなものとして理解されているかを詳しく検討する必要がある。例えばカルナが誕生する場面を見ると (MBh 1.104; 上村 2002–2005. I: 383–385), カルナの父である太陽神は「世界を榮えさせる者」(*lokabhāvanam*) や「最も恵深い者」(*dadatām śreṣṭhaḥ*) と形容されており (MBh 1.104.9,

²⁰紀元後 300–350 年ごろか、辻 1973: 22–24 参照。

²¹『カルナの重荷』の翻訳としては Miller 1985; 野部 1994 がある。

²²*R̥gveda* 1.175.4, 4.28.2, 4.30.4, 5.29.10, 6.31.3。これらの用例については Macdonell 1897 (1971): 31; Dumézil 1954: 62; Greer 2002: 128–129, n. 245 を参照した。

²³しかし、あまりに言及が簡素なため、ここから神話の全体を再構成することは不可能である (Dumézil 1954: 62)。

12), その性格は上記の川尻氏の発言とは真逆である²⁴.

次に、川尻氏は太陽を「昇るが必ず沈む存在」とし、「その道は常に定まっている」と述べる (pp. 93–94). 上記の「太陽はインドの風土においてしばしば苛烈に過ぎ、必ずしも豊穡や安寧を約束しない」という見解と合わせ、太陽の性格をカルナに投影した上で、「太陽神の子たるカルナには過酷な運命が与えられ」た、という見方を提示している (p. 94). ここですぐさま付け加えなければならないのは、太陽は確かに必ず沈む存在ではあるが、それと同時に、必ず再び上昇してくる存在でもあるということである。この点を川尻氏はどう処理するのだろうか。

2.22 その他の誤記、誤解、記述不足

上記に加え、序論部に散見される誤記、誤解、記述不足の類いを以下に列挙しておく。

- p. 4: Naropakhyāya > Nalopākhyāna
- p. 9: Virātaparvan > Virāṭaparvan
- p. 9: Āśramavasikaparvan > Āśramavāsikaparvan
- p. 9: Mahāprasthanikaparvan > Mahāprasthānikaparvan
- p. 10: Svargarohanaparvan > Svargārohaṇaparvan なお、svargārohaṇa という単語に「天界」という訳語を与えるのは正確ではない。「天界へ (svarga) 昇ること (ārohaṇa)」が原義なので、「昇天」などがよいだろう。
- p. 22: 「水を望むならば水神ヴァルナが祭式において称えられ」 > 『リグヴェーダ』において雨を求めてヴァルナが呼びかけられることが全くないわけではないにしても (*R̥gveda* 5.63 など)、ヴァルナは水の神というよりは王権の神であり、秩序を管理する性格が強い (後藤 2016: 508). ヴェーダ期において雨を降らせることを大きな特質とする神はパリジャニヤである²⁵.
- p. 35: ウパシシャッド > ウパニシャッド
- p. 37: ウパシシャッド > ウパニシャッド
- p. 54: 上村 (二〇二二) > 上村 (二〇〇二)
- p. 55: ウパシシャッド > ウパニシャッド
- p. 68: 「水を欲したときには水の神の呪文によって清浄な水を与えた」 > 川尻氏の説明ではアルジュナが何か呪文を唱えて水を出したように読めてしまうが、実際には、矢に呪文を唱えかけ、その矢に「雨神のアストラ」(parjanyastra) を合体させ、矢を地面に射出すると、水が現れるのである (川村 2023: 259).
- p. 72: 「生き残ったパーンダヴァ五王子とクリシュナ、サートヤキはアシュヴァッターマンを追い」とあるが、大虐殺を行ったアシュヴァッターマンを追ったのは、最初にビーマとナクラの二人 (MBh 10.11; Johnson 1998: 61–63; Debroy 2015. VIII: 46–49), 続いてユディシュティラ, アルジュナ, クリシュナの三人であり (MBh 10.13; Johnson 1998: 68–70; Debroy 2015. VIII: 52–53), サハデーヴァとサーティヤキは追っていない。

²⁴一方で、太陽の熱が苦しみをもたらすものであることを語る描写も『マハーバーラタ』には確かに存在する (例えば MBh 11.18.15).

²⁵Macdonell 1897 (1971): 83: ‘The shedding of rain is his most prominent characteristic’.

- p. 94:「沖田（二〇一九）二七ページによれば、『マハーバーラタ』における弓術はほぼ魔術であり」> これは、参照先の沖田 2019: 27 も含めて、誤解を与える記述である。『マハーバーラタ』に登場する神器類は確かに弓で放つものが多いが、その一方で、普通の弓術戦も至るところで描写される。

3 翻訳部

本書の最も致命的であると思われる欠点は、翻訳部が本書最大の売りのはずであるにもかかわらず、翻訳上の不備が驚くほどに多いことである。以下では、はじめに川尻訳全体に見られる問題点を論じた上で (3.1), MBh 8.49.25–34 ならびに MBh 8.66.1–11 について川尻訳とサンスクリット原典とを比較検討し、川尻訳を利用するにあたってはどのようなことに注意すべきかを示す (3.2)。最後に、第 8 巻のクライマックスとも言えるカルナ殺害の場面 (MBh 8.66–67) について評者二人による試訳を提示する (3.3)。

3.1 翻訳の諸問題

以下では、四つの観点 (3.1.1 批判校訂版を翻訳する意義, 3.1.2 先行訳の確認不足, 3.1.3 登場人物の呼称, 3.1.4 翻訳部の構成) から川尻訳に見られる全体的な問題点を指摘する。

3.1.1 批判校訂版を翻訳する意義

本書はいわゆるプーナ批判校訂版 (Sukthankar et al. 1927–1966) の邦訳である。本書を評価するにあたっては批判校訂版がどのようなものであるのかをまず整理しておくべきであると思われるが、以下では、『マハーバーラタ』の批判校訂版について日本語で読める資料が限られている現状に鑑み、批判校訂版についての一般的な解説を折り込みつつ、本書の翻訳の問題点を論ずることとする。

批判校訂版は特定の写本や、最も流布しているニーラカンタ注に基づいた『マハーバーラタ』とは異なり、南アジア各地で伝承されている様々な文字系統で伝承されている写本の読みを比較検討し、異なる読みから一定の原則に基づいて、現在再建できる限りにおいて、最も原典に近いと思われる形を復元したものである。なお、『マハーバーラタ』は少なくとも数百年以上の期間に渡って編纂されたと想定されているが、最初期には吟遊詩人による口頭伝承であった²⁶ものがある時点で写本に書き写され、南アジア各地で写本の形で伝承されるようになったと考えられている。批判校訂版が復元しようとして試みているのは口頭伝承の段階における『マハーバーラタ』ではなく、現存写本のもとになった写本 (テキスト) が完成した当時の『マハーバーラタ』である。この『マハーバーラタ』はグプタ朝期に完成したと想定されていることから、「グプタ・テキスト」とも言われる。

批判校訂版は全ての現存写本は一つの写本の派生であると想定しているわけではあるが、言い換えれば、批判校訂版では、異なる複数の口頭伝承から異なる複数の写本伝承が生じたという可能性は勘案されていないということでもある (cf. Bigger 1998: 14–15)²⁷。『マハーバーラタ』にお

²⁶ 『マハーバーラタ』の口頭伝承的性格は、定型句の用法に顕著に見られるとされている。MBh における定型句の研究史については、de Jong 1975; 1985 に詳しい。また最近のコンピューターを用いた韻律研究としては、Sellmer 2015 がある。

²⁷ 批判校訂版では、いわゆる「グプタ・テキスト」から各系統に分岐していったと想定し、分岐図 (ステンマ) を作成している。これは、特定の誤記は伝承過程の下流には伝承されるが、異なる伝承過程には伝承されることはない想定した上で、誤記の共有状況や写本間の誤記の寡多によって各写本の系統を再建する

る口頭伝承的要素の研究は、批判校訂版の出版以後盛んに議論されるようになったテーマであるため、批判校訂版に対して口頭伝承を想定していないことを批判することは正当性に欠く。むしろ、批判校訂版の完成によって叙事詩の口頭伝承的性格がより正確に議論できるようになったのであるから、口頭伝承に関する議論の素地を築いたことは批判校訂版の学術的貢献の一つと考えるべきであろう。残念ながら、叙事詩文献を口頭伝承で伝える伝統は途絶えてしまっており、叙事詩文献の口頭伝承とテキストの変遷の関係性については未だ解明されていないことが多いのが現状である²⁸。

批判校訂版の重要な編纂指針の一つに、*lectio difficilior potior* というものがある。これは、一つの箇所について、二つの異なる読みがある時に、より難解な読みを採用するというものである²⁹。これは写本の筆写者は、平易な読みをより難解なものに修正するよりも、難解な読みを平易なものに修正する傾向が強いという想定に基づいている。換言すれば、読みが簡単であればあるほど、それは様々な書き換えがなされた結果である可能性が高いため、より難解な読みがよりテキストの原型に近いと想定するということである。往々にしてサンスクリット叙事詩・プラーナ文献においては、伝承過程においてより理解しやすいように改変される傾向が強く、さらに平易なバージョンの方がより人気を博する傾向が強い。

なにをもって「難解」「平易」とするのかについては、複合的な観点から考察する必要がある、機械的に決定できるものではない。難解であればその読みが必ず原型に近いというわけでもなく、難解な読みは単なる転写ミスや伝承上の混乱によるものである可能性もある。また、南アジアではサンスクリットを用いる知識人の中には、パーニニ文法、ヒンドゥー教神学、詩論、哲学諸学派の教義等について、一定の古典的教養が共有されており、叙事詩文献はそのような教養が形成される前に成立したものであるにもかかわらず、叙事詩文献は古典的教養を体現するものであると考えられたために、古典的教養に合致するような形で文献が書き換えられるという現象も頻繁にみられる（cf. Takahashi 2023: 28, fn. 18）。この場合、「難解」な読みとは古典的教養に合致しないもの、とも理解できるだろう。

南アジアにおいて最も流布している『マハーバーラタ』のテキストは、ニーラカント注が施されたバージョンであるが、このニーラカント版はサンスクリット語として理解しやすいように、またいわゆる古典的教養に合致するように、様々な改変が施されたものである。南アジアにおける『マハーバーラタ』の影響等を研究する際には、ニーラカント版が有用であることには間違いない（cf. Biarreau 1968, 1970a, 1970b; Bedekar 1969）。しかし批判校訂版が目指すものは、サンスクリット語として分かりやすく、人気があり、古典的教養とも矛盾することのない『マハーバーラタ』で

手法である。この手法は、Lachmann がプラトンの著作に対して考案したもので、西洋古典学分野だけでなく、サンスクリット語文献分野でも広く用いられている手法である。この方法の問題点としては、各系統の分岐後に、各系統間で影響を与えあった可能性については考慮に入れていないことが挙げられる。筆写者が、単一の原本から写本を作成したのであれば、Lachmann の仮定は支持できるが、実際には筆写者は複数の写本を比較検討して写本を作成しており、そのプロセスで各系統間の混交（contamination）が起こっているはずである。この混交が想定されていない点において、Lachmann の方法には問題がある。Lachmann の方法およびその問題点については、納富 2015 を参照されたい。『マハーバーラタ』における混交の問題については管見の限り、個別の読みについて議論されることはあるが（Hacker 1961: 79 など）、体系的な研究は未だなされていない。また Lachmann の手法がどこまでサンスクリット文献について有用であるのかを検証した最近の研究としては、De Simini 2017 がある。

²⁸口頭伝承と筆記による伝承についての人類学的研究については、Ong 1982 が有名であるが、Ong によって議論されている口頭伝承の一般的特徴は、サンスクリット文学における口頭伝承の特徴には当てはまらないと思われることも多く、Ong の議論については批判的再検討が必要である。

『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』では、それぞれの古層と思われる部分に、吟遊詩人が好んで用いたと思われる定型句が多く見られ（Brockington 1985）、口頭伝承とテキストの変遷を分析するには、両文献の並行箇所や定型句の用法を比較するのが有用であるように思われる（cf. Koskikallio 1995; Hara 1997; Brockington 1998: 154; Takahashi 2018）。

²⁹*lectio difficilior potior* については、伊藤 2015: 64-67 を参照。

はなく、著作当時のテキストの姿に肉迫することである。批判校訂版は、流布本だけでなく、南アジア各地の古写本を収集・比較することで、より難解で理解しにくいものの、原型に近い『マハーバーラタ』の姿を復元することには概ね成功していると言えるだろう³⁰。また批判校訂版によって復元されたテキストは、決定版ではなく、校訂者による仮説の提示に過ぎない。批判校訂版には、そのテキストと異なる読みを示す写本の情報も全て掲載されており、批判校訂版を読む際には、批判校訂版の読みの根拠を異読情報と比較検討しつつ、常に批判校訂版の判断を検証する必要がある。

川尻氏の訳書は、より理解しやすい流布版ではなく、批判校訂版の訳を謳っている以上、その真価は批判校訂版における難読箇所をいかに正確に解釈しているのかどうかによって判断されるべきであろう。残念ながら、本書では原文の単純な読み落としや読み間違いが高頻度で見られ、難読箇所であることすらも認識されず、原文から逸脱した訳がなされていることが多い。また、批判校訂版の難読箇所については、十分な検討なしに異本の読みが採用されている場合もある。以下では本書訳出部分に見られる難読箇所のうち、二つの例を取り上げ、本書の問題点を指摘する。

MBh 8.49.72 (サンジャヤの言葉)

ity evam uktas tu janārdanena pārthaḥ praśasyātha **suhṛdvadham tam** |

tato 'bravīd arjuno dharmarājam anuktapūrvaṃ paruṣaṃ prasahya || 72 ||

川尻訳：このようにクリシュナに言われて、アルジュナはこの友人の教えを讃えてから、ユディシティラにあえて今まで言ったことのない汚い言葉を浴びせた。

修正訳：と、そのようにジャーナルダナ（クリシュナ）に言われたプリターの子（アルジュナ）は、善心者（ユディシティラ）をこのように殺すことに賛同し、アルジュナは法王（ユディシティラ）に対して、わざと今まで言ったことがないような辛辣な言葉を放った。

MBh 8.48.2–15 において、ユディシティラは、戦闘で成果を挙げられないアルジュナに対して、ガンディーヴァ弓をクリシュナに渡せ、と言う。アルジュナはかつて、彼に対してガンディーヴァ弓を他人に渡せ、と言う者がいれば、その者を殺すという誓いを立てていたので、アルジュナは何らかの方法でユディシティラを殺さなくてはならない。そこでクリシュナは、ユディシティラに侮蔑的な言葉を浴びせることによって、ユディシティラを殺したことにし、後で許しを乞えばよい、とアルジュナに助言する。ここで難しいのは **suhṛdvadham tam** 「善心者をこのように殺すこと」をどのように理解するかである。suhṛd の本来の意味は、「良き心・心臓を有する者」であるが、「友人」という意味で用いられることも多い。しかし、ユディシティラはアルジュナにとって、兄弟ではあっても、友人ではないので、原義に近い意味で「善心者」と訳するのが適切であろう。あるいは、これはクリシュナから見たユディシティラを「友人」(suhṛd) として捉えていると考えることも不可能ではないが、この詩節はアルジュナの視点から語られているため、可能性は低い。また、suhṛd 「友人」をアルジュナにとっての友であるクリシュナであると捉えて、「友人（であるクリシュナ）によって [提言されたユディシティラを] 殺すこと」とすることもできるが、この可能性も極めて低い。

川尻訳では、この部分は「この友人の教え」とされているが、suhṛdvadham tam にそのような意味はない。おそらく Kinjawadekar 版の読み suhṛdvacas tat 「その友人の言葉」を採用していると思われる。suhṛdvacas tat の場合には、単にアルジュナが、その友人であるクリシュナの言葉を賞賛した、と理解できるので、この詩節は全体として単純明快な一文となり、上述のような解釈上の諸問題は生じない。本書 (p. 101) では訳出に際して、批判校訂版以外の刊本の読みを採用する場合に

³⁰批判校訂版の諸問題については、Dunham 1991; Grünendahl 1993a, 1993b, Phillips-Rodriguez et al. 2010; 高橋 2024: 16–19 を参照。

は、「異本による」と注記するとあるが、この箇所についてはそのような注記は見当たらない。難解な読みと平易な読みがある場合には、難解な読みを採用するという批判校訂版の原則に従うならば、*suhṛdvadhāṃ taṃ*という読みを採用するべきであろう。また2.21で示したように、川尻氏は日本語にないサンスクリット語の表記・読みについて不正確な傾向があり、ここでは**suhṛdvādaṃ*「友人の言説」と理解した可能性もある。このような間違いは他の箇所にも見られ（本稿脚注60）、例えばMBh 8.49.77 *dviṣatāṃ*「敵たちの」を**dviṣata*「二百」と理解しているようである。また、本書は批判校訂版によって復元された『マハーバーラタ』のテキストの翻訳ではあるが、批判校訂版そのものは用いていないようである。というのは、川尻氏が底本として挙げているのは、批判校訂版ではなく、批判校訂版のIntroduction、注記、異読情報等を省略し、テキストのみをデーヴァナーガリー文字で刊行した簡略版と、それをローマ字化したTITUS掲載の電子テキストである。デーヴァナーガリー文字では、*d*と*dh*、もしくは*ś*と*ṣ*などは異なる形状の文字として印字されるため、デーヴァナーガリー文字の刊本を読んでいる場合には、上述のような混同は起こりにくい。ローマ字資料を読んでいる場合には起こりうる。したがって、川尻氏はローマ字の電子テキストだけを読んでいた可能性もある。もちろん川尻氏自身がデーヴァナーガリー文字の刊本を音読し、その音読が不正確であることによってこのような間違いが起こった可能性もある。TITUS掲載の『マハーバーラタ』の電子テキストは、徳永宗雄、John D. Smithによって作成されたもので³¹、誤記も少なく、概ね信頼に足るものではあるが、電子テキストはあくまでコンピューター上で特定の語を検索したり、内容を通覧するためのものであり、現在の研究水準では、訳出する場合には批判校訂版の刊本を見ることが求められる。

批判校訂版の刊本はその大部分を異読情報が占めているが、それらを比較検討すると、校訂者がどのような判断を下して一つ一つの読みを選択していったのかが理解できる。評者は第8巻の異読を全て検証したわけではないが、同巻の校訂者であるP. L. Vaidyaは熟考を重ねて読みを選択しているようであり、その判断は一考に値する。少なくとも、上述のMBh 8.49.72のように、批判校訂版とは異なる読みを採用する場合には、校訂者の思考経路を辿ってみる必要がある。*suhṛdvadhāṃ taṃ*については、この読みを採用している写本は、Ś1, 2 K1, 2のみで、多くの写本はKinjawadekar版と同じく*suhṛdvacas tat* (V1 B1, 3-5 Dn1 D1-8 T1-3 G1-3 M1-4)と読んでいる。一部の写本は*suhṛdvacas tataḥ* (K3 B2 D2)というように一音節多く、韻律上不可能な読みを示しており、これは*suhṛdvacas tat*の読みの転写間違いであろう。K4の読み*suhṛdvamaṃ taṃ*はどのように理解すべきかは不明であり、校訂者も*sic.*（原文ママ、すなわちこのままでは理解できない）と表記している。通例、校訂テキストに問題があり、テキストを確定することは難しいと校訂者が判断した場合には、当該部分には波線が施されるが、ここではその波線はなく、校訂者は自信をもってこの読み（*suhṛdvadhāṃ taṃ*）を採用したことがわかる。この読みを支持しているのが、シャーラダー文字写本二本（Ś1, 2）ならびにカシミール系統のデーヴァナーガリー写本二本（K1, 2）と若干少ないが、シャーラダー・カシミール写本には古い形が残っている場合も多く、*suhṛdvacas tat*の場合は簡単に理解することができるので、より原型に近い読みは*suhṛdvadhāṃ taṃ*であると理解したのであろう。ただし、シャーラダー写本では*dha*と*ca*の文字は似ている時があり、また写本伝承一般において語末の*m*, *s*, *t*は書き換えられる傾向がある場合があることを考えると、シャーラダー写本ならびにシャーラダー系写本との関係が強いカシミール系写本において、*suhṛdvadhāṃ taṃ*は*suhṛdvacas tat*の転写間違いである可能性も否定はできないということは付け加えておくべきであろう。しかし、*suhṛdvacas tat*から*suhṛdvadhāṃ taṃ*への変化には多くの書き換えが必要であり、単

³¹本書では、電子テキスト参照にあたっては、TITUSのサイトしか掲載されていない。TITUSはサンスクリット語の電子テキストのプラットフォームであるが、TITUSにも明記されているように『マハーバーラタ』の電子テキストは、徳永宗雄が手作業で打ち込み、それにJohn D. Smithが修正を加えたもので、両氏の意志で研究者の利便を図るためにオンライン上に無償で一般公開されたものである。TITUS運営者は同サイトの形式にあうようにフォーマットを整えただけである。したがって、この電子テキストに言及する際には、徳永・Smith両氏の膨大な努力と学術貢献への意志に敬意を表し、両氏への言及がなされるべきであろう。

なる転写ミスの可能性は低い。以上のような判断を実際に校訂者が行っていたかどうかは不明であるが、少なくとも掲載されている異読情報からはこのような校訂者の考えを窺い知ることができ、それは文献学上十分に支持しうるものである。従って、川尻訳のように *suhṛdvacas tat* の読みを採用する必要はない。

また、巻末の Critical Notes (pp. 676–697) は文献学上問題がある箇所について、校訂者が各異読をどのように判断し、特定の読みを採用するに至ったのかを議論しており、非常に便利である。ただ、MBh 8.49.72 については特に言及はない。批判校訂版はそれぞれの巻の責任者が異なり、全体責任者である Sukthankar の方針に各校訂者がどこまで従っているのかは必ずしも明確でないことも多いが、Critical Notes を丁寧に読み込むと、各校訂者の性格や傾向を理解することもできる。

次に、川尻氏は「異本による」と明示はしているものの、異本による必要はないと思われる例を挙げる。

MBh 8.62.25

dvisāhasrā viditā yuddhaśauṇḍā nānādeśyāḥ subhṛtāḥ satyasamdhāḥ |
ekena śīghraṃ nakulena kṛttāḥ sārepsunevottamacandanās te ||

彼らはその数二千にもおよび、学識があり、戦に酔いしれ、さまざまな地方出身で、高給取りで、誓いを守り、最上の白檀を身につけていたが、ナクラは一人で進路を開こうとすることがとく、早々と彼らの間を切り開いていった。

川尻訳では、*sārepsunevottamacandanās te* について、Kinjawadekar 版の *jayepsnunānuttamacandanāṅgāḥ* 「勝利を望む [ナクラ] によって、この上ない白檀を身につけた [戦士たちは切られた・切り開かれた]」という読みを採用し、以下のようにこの部分を訳出している。

川尻訳：二〇〇〇人の、訓練され、戦いに酔い、様々な出身で、高給取りの、誓いを守る、最高の白檀を身につけたかの英雄たちは、勝利を望むナクラ一人に速やかに殺された。

Kinjawadekar 版の *jayepsnunānuttamacandanāṅgāḥ* の読みを支持している写本はニーラカント注付デーヴァナーガリー写本である Dn1 のみで、他にテルグー写本二本のみ (T1 *jayepsan iva*³²; T2 *jayepsavo T2*) が Kinjawadekar 版に若干近い読みを示している。ニーラカント注付き刊本である Kinjawadekar 版はニーラカントのテキストに基づいているが、この写本状況から、当該詩節における *jayepsnunānuttamacandanāṅgāḥ* という読みは、ニーラカント注もしくはそれに近い写本伝承内で作り出されたものであり、『マハーバーラタ』の原型からは遠いものであることが分かる。そのため、ここで Kinjawadekar 版の読みに従うという川尻氏の判断は文献学的には支持し難い。批判校訂版の読み (*sārepsunā_iva_uttamacandanās te*) の難しさは、*sāra* は通常「精髓」を意味し、「精髓を得ようと望む [ナクラ] によって」というのは戦闘の場面には合っていないように思われることである。*sāra* には、「精髓」という意味の他に、「進路・道」という意味もあり、ここではその意味で解釈した。ナクラはたった一人で二千にも及ぶ敵兵の間を分け入って進んだことをこの詩節は示していると思われる。*kṛttāḥ* について川尻訳では「殺された」とされているが、*kṛttāḥ* の原義は「切る、切り分ける、分裂させる、打ち壊す」(Mayrhofer 1992–2001. I: 315–316) で、*kṛttāḥ* は「殺された」とするのも間違いではないが、*sārepsuneva* 「進路を開こうとすることがとく³³」とい

³²文法的に正しい形は、*jayepsann iva* であるが、ここでは韻律上第三音節は軽音節が要求されるため、*jayepsan iva* という文法的には間違った形が用いられていると思われる。ただし、この形は男性主格単数形であって、*te* という男性複数主格形と数が一致していない。

³³直訳すれば「進路を得ようとすることがとく」となるが、ここでは「進路」という目的語に合わせて「開こうとすることがとく」と訳している。

う表現を考慮すると、原義通り「切り分けた、切り開かれた」と訳するのが妥当であろう。また川尻氏の翻訳は、この場合のようにサンスクリット語では鮮やかな動作を意味する動詞であるにもかかわらず、「殺す」「破壊する」といった一般的な言葉で訳す傾向があり、通読すると戦闘シーンは非常に単調な叙述が続いているような印象を与える³⁴。なお、サンスクリット語原文では川尻訳のように受動態構文が用いられているが、上掲の翻訳では日本語としての読みやすさを考慮して能動態構文に書き換えている。これは訳者の好みで決定すべきものであり、川尻訳の瑕疵を示すものではない。

以上のように、批判校訂版の重要な学術的貢献である『マハーバーラタ』の難読箇所について、批判校訂版の校訂者の意図を読み取り、それを忠実に翻訳しようとする努力が注がれるべきであったと思われる。

3.1.2 先行訳の確認不足

本書訳出部分については、現代諸語に翻訳されており、その一部は本書でも参考文献として挙げられている。本書には単純な読み違いや、前後の文脈を追っていないがゆえの間違いも多いが、最低限の先行訳との比較を行ってれば、防止することができたと思われるものも少なくない。

批判校訂版の本書訳出部分の先行訳としては、管見の限り以下のようなものがある。

- 原「Tvam—古典梵語二人称不敬代名詞」（1997）
二人称代名詞 tvam が不敬の意味を表す場合についての論考で、pp. 82–92 に MBh 8.49–50（アルジュナがユディシティラを罵る場面）の邦訳が収録されている。
- Hildebeitel, “Krishna in the Mahabharata: The Death of Karna” (2007) (Hildebeitel 2011: 411–459 再録)
MBh 8.65.16–69.43（カルナの死）の英訳が pp. 38–58 に収められている。訳出部分については詳細な訳注が施されており、特に先行研究におけるカルナおよびクリシュナの解釈を知るのに非常に便利である。
- von Simson, *Mahābhārata: Die grosse Erzählung von den Bhāratas* (2011)
本書は『マハーバーラタ』全巻の詳細な要約ならびに有名な物語や逸話の原典訳を収録したものである。pp. 326–328 に MBh 8.63.25–61d（カルナとアルジュナの戦いにおける諸神格・魔物等の介入）の独訳があり、また、その部分についてのヒンドゥー神話学的観点からの解説（pp. 756–758）が収められている。
- Schaufelberger & Vincent, *Le Mahābhārata: Texte traduit du sanskrit. Tome I–VIII* (2013–2018)
本書は、批判校訂版の部分訳ではあるが、翻訳されていない部分についても各章の要約が収録されている。特に部分訳では省略されがちな教説部分についての部分訳が多く収録されているのが特徴で、最低限ながら脚注で人物関係等を整理してくれている。Tome V, pp. 46–73 に MBh 8.60–67（ドゥフシャーサナおよびカルナの死）の仏訳が収録されている。
- Debroy, *The Mahabharata. Vols. 1–10* (2015)
『マハーバーラタ』批判校訂版の英語完訳である。大まかな流れを掴むには便利ではあるが、細部については改善の余地があるので、引用等を行うにあたっては注意が必要である。

³⁴その他の例としては、本稿 3.2.2 節、MBh 8.66.3 に対するコメントを見よ。

Debroy 2015 は扱いに注意が必要であるが，それ以外の翻訳は信頼に足るものであり，訳出にあたっては非常に有用である．Debroy 2015 以外では，原 1997，Hiltebeitel 2007 は本書でも参考文献として挙げられているが，本書と原 1997，Hiltebeitel 2007 とでは，解釈が異なる場合が多く，後述するようにそのような場合には，往々にして原 1997，Hiltebeitel 2007 の方がサンスクリット原典に忠実である．

また Kinjawadekar 版の英訳である，Bowles, *Mahābhārata, Book Eight Karṇa, Volume Two* (2008) は，本書では言及されていないが，サンスクリット原典に忠実な翻訳で，批判校訂版と Kinjawadekar 版のテキストが一致する場合には非常に有用である．Kinjawadekar 版と批判校訂版では，章立てだけでなく，詩節の順番も異なるため対応箇所を確認するには時間がかかるが，批判校訂版 pp. i–lxxviii には批判校訂版と各校訂版の対応一覧表が掲載されており便利である．

3.1.3 登場人物の呼称

本書の翻訳部分では，数々の登場人物名や異名が出てくるが，その登場人物がどのような者なのか，また異名は誰のことを指すのかが明記されていないため，よほど作品に親しんでいる人でない限り，読み進めるのは難しいと思われる．上村訳にあるように，登場人物の簡単な説明表がふさされるのが望ましい．異名についても，誰の異名なのか，さらに可能であればどのような意味をもった異名なのかを簡潔に提示する表などがあるのが望ましかった．本書で扱われる部分に登場する人物名や異名については，Bowles 2008 の “Proper Names and Epithets” の箇所 (pp. 585–595) においてそれぞれ簡潔な説明が与えられていて有用である³⁵．

上村訳のように読みやすさを重視して，異名であっても，特別なものや文脈上意味があると思われるものを除いて，全てアルジュナ，ユディシティラ等に統一するというのも一つの方法であったと思われる．

また本書においては人物の呼称部分について，不注意もしくは人物関係を理解していないことによる誤訳が多く見られる．例えば，MBh 8.50.28 において御者のサンジャヤがドリタラーシトラ王に対して *māriṣa* と呼びかけているが，川尻氏はこの語を「父よ」（本書 p. 118）と訳している．しかし，*māriṣa* には「父」という意味はなく，「陛下」という意味である．御者サンジャヤは，ガヴァルガナの子であって，ドリタラーシトラの子ではない．御者と王という関係性を考慮すると，サンジャヤはドリタラーシトラに対して「陛下」と呼びかけていると理解するのが妥当であろう．

3.1.4 翻訳部の構成

本和訳は上村訳とは違い，章以外に内容を区切るものがないため読みづらい．章それぞれだけではなく，章の内部でも場面が変わることがあるため（例えば第 60 章ではカルナとパーンチャーラ戦士たちの戦いから，ビーマとドゥフシャーサナの戦いへと話が移行する）³⁶，上村訳のように小見出しをつけてくれば，読みやすさが違ったと思われる．

『マハーバーラタ』は，18 の巻 (*parvan*) に分けられるが，それらの 18 の巻はさらに 100 の巻に分けられる．なお 100 の巻のうち，最後の 2 巻は『マハーバーラタ』の補遺とされる『ハリヴァ

³⁵ただし抜けもあるので，使用する際には各自で補っていく必要がある．

³⁶ちなみに，印象深いドゥフシャーサナ殺害の場面であるが，川尻訳では誤訳のためにやや違った話になってしまっている．8.61.6ac *asiṃ samuddhṛtya śitaṃ sudhāraṃ kaṇṭhe samākramya ca vepamānam* を川尻 2022: 183 は「鋭い剣を掲げて震える者の喉元に突きつけ」と訳す．まず，*sudhāraṃ* 「尖った」の訳が抜けている．次に，川尻訳「剣を～喉元に突きつけ」は構文上も *samākramya* の語感上もありえない訳である．正しくは「喉元をしかと踏みつけ」である．全体として「鋭い尖った剣を掲げ，悶える [ドゥフシャーサナ] の喉元をしかと踏みつけ」となる．身悶えするドゥフシャーサナの喉元を足で踏みつけ，その胸を剣でもって切り裂いたのである．

ンシャ』に相当する。現代の『マハーバーラタ』研究では、一般に 18 で分ける場合はその区分単位は、major parvan（大巻）と呼ばれ、100 で分ける場合には sub-parvan（小巻）と呼ばれる。サンスクリット語ではともに単に parvan と呼ばれるため、大巻と小巻の区別はサンスクリット語の術語としては存在しない。写本によっては両者が並記されているときもあれば、一方のみが記載されているときもある。『マハーバーラタ』研究では一般に大巻による区分のみが用いられることも多いが、『マハーバーラタ』諸翻訳では大巻以下の区切りに小巻の区切りが利用されることも多く、van Buitenen・Fitzgerald 訳や Debroy 訳では小巻の通し番号が振られている。大巻・小巻という区分が並立するに至った経緯は未だに不明であることが多いが、3 世紀後半頃とされる Spitzer 写本 (cf. Franco 2004. I: 32–33, 2006) の『マハーバーラタ』巻一覧には、大巻・小巻の巻名が混在して用いられていることから、少なくとも 3 世紀後半頃には、現在の批判校訂版に見られるような大巻・小巻の区別は確立していなかったとされる (Schlingloff 1969: 338)。

大巻・小巻の次の下位区分は章であるが、各章には写本によっては章名が与えられていることもあり、さらに連続した章で同じ章名が使われている場合には、それらの章は一つのまとまりとして理解することができる。ただし、章名を与えるかどうかについては、各巻にばらつきがあり、章名は『マハーバーラタ』編纂当時には存在していなかった可能性が高く、そうした事情もあってか、批判校訂版の校訂テキストには含まれていない。第 12 巻では多くの写本に章名が記載されており、さらに各写本で与えられている章名が一致することも多いことから、少なくとも諸写本が分岐する以前には章名が存在していたことが想定される。第 12 巻の研究では、同じ章名が連続している範囲でテキストを区切り、個別研究を行うのが主流となっている。そのようなテキスト区分に基づいて、第 12 巻の構成および編纂史を論じた研究としては Fitzgerald 2006 がある。一方で、本書で訳出されている第 8 巻の写本には章名が記載されている写本は数本しか存在せず、第 8 巻の章名が付されるようになったのは伝承過程の中でも比較的后代であると推測できる。

従って、『マハーバーラタ』を訳出する際の大巻以下の区分については小巻によるか、章名による（厳密には同じ章名が与えられている諸章をひとまとめとする）か、あるいは、上村訳のように、小巻・章名を参考にして適当に区切りを与えるか、といった選択肢が考えられる。第 8 巻における小巻は一つしかないため、本書翻訳部分については章名もしくは内容によって区切るしかないが、そのような区切りがあれば、読み進めやすい訳書になったのではないと思われる。

3.2 川尻訳の検証 (MBh 8.49.25–34, 8.66.1–11)

以下では、MBh 8.49.25–34, 8.66.1–11 について川尻訳を原典と照らし合わせて検証する。MBh 8.49.25–34 については高橋が、MBh 8.66.1–11 については川村がそれぞれ担当した。

3.2.1 MBh 8.49.25–34

8.49.25–26

idaṃ dharmarahasyaṃ ca vakṣyāmi bhāratarṣabha |
yad brūyāt tava bhīṣmo vā dharmajñō vā yudhiṣṭhiraḥ ||
viduro vā tathā kṣattā kuntī vāpi yaśasvinī |
tat te vakṣyāmi tattvena tan nibodha dhanamjaya ||

川尻訳：アルジュナよ、私はビーシュマによって、または法を知るユディシュティラによって述べられたこの法の秘密をあなたに述べよう。聞きなさい、アルジュナよ、私はあなたに、混血のヴィドゥラによって、あるいは偉大なるクンティーによって述べられた [この法の秘密を] 真実によって告げよう。

修正訳：そして，ここに法の秘密を語ろう，バラタの雄牛（アルジュナ）よ，ビーシュマ，あるいは法を知るユディシティラ，あるいはクシャットリ³⁷であるヴィドゥラ，あるいは名高きクンティーであっても，語るであろうような法の秘密を．真実の通りにそれをあなたに語ろう．それを聞きなさい，ダナンジャヤ（アルジュナ）よ．

- 24a idaṃ 「ここに」川尻訳では「この」というように前方照応の機能を果たす指示代名詞として理解されているが，このような訳が成立するためには，それより前にこの「法の秘密」がすでに説かれていなければならない．しかし，24c (brūyāt) の項目において詳述するように，「法の秘密」はこの第 24 詩節より前に語られている内容ではない．したがって上掲訳では，vakṣyāmi 「語ろう」というクリシュナの行為によって発話の場に現出するものを指す機能を果たす idaṃ として理解し，「ここに」と訳出した．
- 24c brūyāt: 川尻訳では，「……によって述べられた」というように，過去を表す願望法として訳している．確かに叙事詩サンスクリットでは，願望法はしばしば過去の意味として用いられる (Oberlies 2003: 137–141)．過去の意味で理解するなら，ユディシティラが語った内容としては，ガンディーヴァ弓をクリシュナに渡し，アルジュナが御者となれ，という発言 (MBh 8.48.2–15) を指していると考えられる．しかし，ビーシュマやその他ここで挙げられている人物が，このことについて語っている内容は見当たらない．したがって，この願望法は，ビーシュマもしくはユディシティラであれば，アルジュナに語るような，という意味で，仮定を表すものと理解するのが妥当である．
- 25c api 「～であっても」訳抜け．
- 26b yaśasvinī を川尻訳は「偉大なる」としているが，原義は「名声を有する者」という意味である．

8.49.27

satyasya vacanaṃ sādhu na satyād vidyate param |
tattvenaitat sudurjñeyaṃ yasya satyam anuṣṭhitam ||

川尻訳：真理の言葉は正しく，真理以上のものはない．その真理が完成したものの言葉は真実によっても実に理解し難い．

修正訳：真理の言葉は良きものであり，真理以上に優れたものはない．真理が実践されるとき，[それを表現する] 言葉をありのままに理解することは非常に難しい．

³⁷kṣattrī は *Mānavadharmasāstra* 10.12 では，シュードラ男性とクシャットリヤ女性の間生まれた混血階級であるとされているが，ヴィドゥラはヴィヤーサと召使女との間に生まれた子である．ヴィヤーサ自身のヴァルナがクシャットリヤとすべきかどうかについては問題があるが，ヴィヤーサは王族であるチトラーンガタもしくはヴィチトラヴィーリヤの代理父として，シュードラ身分の召使女に子を産ませたと解釈するならば，ヴィドゥラはクシャットリヤ男性とシュードラ女性の息子であり，kṣattrī の定義には厳密には当てはまらない．ただ，ヴィドゥラについては，クシャットリヤとシュードラの混血であることには変わりなく，混血身分の定義については，文献によってそれぞれ微妙に異なることを考慮すると，男女の出身身分について何らかの混同があった可能性は否定できない．梵辞書 *Vācaspatya* では，kṣattrī は dāsīputra 「奴隷女の息子」であるとされており，もしこの定義が正しければ，ヴィドゥラの出生にあてはまることにはなるが，評者は少なくとも法典文献において kṣattrī を奴隷女の息子として理解できるような用例を見つけることはできなかった．また，Macdonell & Keith 1912. I: 201 は，ヴェーダ文献では，kṣattrī は門番や御者などさまざまな王の取り巻きの意味として使われているとしており，ヴィドゥラが kṣattrī とされるのは，単に王付の侍従であるからであるかもしれない．kṣattrī の諸問題については，石原 2023 における MBh 11.9.7 「クシャットリ」に対する注記を参照されたい．

- 川尻訳では、27d *anuṣṭhita* は「完成した」と訳されているが、この語は、「着手する、実践する」という意味の方が一般的である。また川尻訳において「その真理が完成したもの」という時、訳者が「真理が完成した事柄」を指すのか、「真理が完成した人物」を指すのか不明である。
- 修正訳では、川尻訳に従い、*satyasya vacanaṃ* という a 句の表現を参考に、*pāda c* に *vacanaṃ*（中性・単数）という言葉の主語として補った³⁸。

8.49.28

bhavet satyam avaktavyaṃ vaktavyaṃ anṛtaṃ bhavet |
sarvasvasyāpahāre tu vaktavyaṃ anṛtaṃ bhavet ||

川尻訳：真理は言葉で言わざるべきかもしれない、一方嘘は言葉でいうべきかもしれない。自らの財産を全て失うようなときには、嘘を言葉で言うこともできる。

修正訳：真実を言うべきでない時があれば、虚偽を言うべき時もある。また自身の全財産が奪われようとしている時には、虚偽を言わなければならないこともある。

- a, b, cd 句において、(a)*vaktavyam* . . . *bhavet* という構文が続けて用いられているが、(a)*vaktavyam* は、「言わなければならない・言ってはならない」という義務の意味で理解し、*bhavet* の願望法は可能性「～という場合もある」という意味で理解するのが妥当であろう。川尻訳では、a, b 句の *bhavet* は、可能性の意味で理解しているにもかかわらず cd 句の *bhavet* は「～こともできる」というように可能の意味で訳しており、さらに d 句 *vaktavyam* の「～しなければならない」というニュアンスを無視している。
- c 句 *apahāra* は「奪うこと・略奪」であって、「失う」という意味ではない。

8.49.30

prāṇātyaye vivāhe ca vaktavyaṃ anṛtaṃ bhavet |
yatrānṛtaṃ bhavet satyaṃ satyaṃ cāpy anṛtaṃ bhavet ||

川尻訳：生命の終わりや結婚のときには、嘘を言葉で言うこともできる。嘘が真実になるとき、真実もまた嘘になるだろう。

修正訳：生命の危険および結婚においては、虚偽を言うべき時もある。そのような場合には、虚偽（として言われること）が真実であり、真実（として言われること）の方が虚偽であるということもある。

- *prāṇātyaya*. 言葉の意味からは、「生命の終わり」とも「生命の危険」ともとりうる。原 1997: 84, n. 23 は、『マハーバーラタ』やその他の文献において、嘘を言ってもよい五種もしくは四種の場合が議論されている箇所を翻訳とともにあげている。それによると、MBh 12.35.25 では、自他の命を守るためには嘘をついても良いとされており、*prāṇātyaya* はここでは、「生命の終わり」ではなく、「生命の危機」であると理解できる。

³⁸なお、原 1997: 84 は、cd 句を「測りがたきは実に、人の不妄語を実践するにあり」とし、d 句の *yasya* を「人」でとっているようであるが、この場合一般的には *yasya* の文法的性は男性になることが予測されるが、d 句 *yasya* の先行詞 *etat* は中性であるため、原 1997 の解釈は難しいと思われる。

- 川尻訳では，c句を yatra による従属節，d句を主節としているが，cd句全体が従属節で，ab句がそれに対応する主節であるとも理解できる．二つの解釈のどちらがより蓋然性が高いかについては決定的な根拠はないため，どちらを選択するかについては，訳者の好みで決定してよいものと思われる．

8.49.31 cf. MBh 12.110.7

kim āścaryam kṛtaprajñāḥ puruṣo 'pi sudāruṇaḥ |
sumahat prāpnuyāt puṇyam balāko 'ndhavadhād iva ||

川尻訳：知恵を得てなお極めて残酷である人が，どうして盲目〔の獣〕を殺すことで，バラカのように素晴らしき徳を得ることができようか．

修正訳：非常に残酷な人間であっても，知恵を大成させた人が非常に大きな功德を得たとして，それは驚くべきことであろうか（いや当然である）．ちょうどバラカが盲獣を殺すことによって〔非常に大きな功德を得た〕ように．

- a句 āścaryam 「驚き」訳抜け．この訳抜けによって，この詩節全体の川尻訳は，「いかなる驚きがあるか—いやない」という反語表現を見逃しており，原文の意味するところから真逆になっている．
- 川尻訳では，句読点の位置から，「盲目の獣を殺す」という内容は，「知恵を得てなお極めて残酷である人」という一般化された内容に関連している印象を与えかねないが，原文ではバラカにかかっている．
- ab句 kṛtaprajñāḥ puruṣo 'pi sudāruṇaḥを，川尻訳は「知恵を得てなお極めて残酷である人」とし，api「～であったとしても」を kṛtaprajñāḥ「知恵を得た者」にかけているようであるが，apiの位置，ならびに文脈から考えて，puruṣo... sudāruṇaḥ「非常に残酷な人間」にかける方がよいと思われる．
- c句 sumahat 「非常に大きな」については，su-「非常に」の部分訳抜け．
- c句 puṇya については，「徳」という意味と，その結果としての「功德」の意味がある．川尻訳は前者でとっているようであるが，ここでは puṇya は，動詞 pra + √ap「得る」の目的語であることから，「功德」の意味でとる方が自然である．

8.49.32

kim āścaryam punar mūḍho dharmakāmo 'py apaṇḍitaḥ |
sumahat prāpnuyāt pāpam āpagām iva kauśikaḥ ||

川尻訳：また，法を望みながら愚かである人がどうして川〔にいる〕カウシカのように大きな罪を得ることであろうか．

修正訳：また逆に，法を〔実践したいと〕望みながらも，愚かで学識のない者が，非常に大きな罪咎を得たとしてそれは驚くべきことであろうか（いや当然である）．ちょうど川辺に住むカウシカが〔大きな罪咎を得たように〕．

- a句 āścaryam 「驚くべきこと」訳抜け．第31詩節参照．
- b句 apaṇḍitaḥ 「学識のない」訳抜け．

- d 句 āpagām（目的格）については、空間を表す目的格として理解したが（Brockington 2000: 88 参照）、adhivasati「～に住む」といった動詞表現が含意されている可能性もある。大多数の写本（K3 V1 B1-5 Da1 Dn1 D1, 3-8 T1-3 G1, 2 M1-4）は、apagāsv「諸川のほとりに」と読んでおり、この異読を採用してもよいかもしれない。

arjuna uvāca

アルジュナは言った。

8.49.33

ācakṣva bhagavann etad yathā vidyām ahaṃ tathā |

balākāndhābhisambaddhaṃ nadīnāṃ kauśikasya ca || 33 ||

川尻訳：尊師クリシュナよ、バラカと盲目 [の獣] の関係、川とカウシカ [の関係] について、私にもわかるようにお話しください。

修正訳：尊者（クリシュナ）よ、私が理解できるように、バラカと盲獣に関することと諸川とカウシカに [関すること] を説明してください。

- 川尻訳は、批判校訂版の読みである c 句 -abhisambaddhaṃ「～に関すること」のかわりに、写本 K3, 4 D8 T1, 2 における異読 -abhisambandhaṃ「～の関係」を採用して読んでいるようであるが、注記されていない。批判校訂版の読みでも問題はなく、さらに -abhisambandhaṃ と読んでいる写本は重要な写本でもないため、ここでは異読を採用する必要性はないと思われる。

kr̥ṣṇa uvāca |

クリシュナは言った。

8.49.34

mṛgavyādho 'bhavat kaścīd bālako nāma bhārata |

yātrārthaṃ putradārasya mṛgān hanti na kāmataḥ || 34 ||

川尻訳：アルジュナよ、バラカというある狩人がいた。彼は息子と妻のために望まずして、獣を殺していた。

修正訳：かつてとある猟師がおり、その名をバラカといった、バーラタ（アルジュナ）よ。彼は妻子を養うために獣を殺してはいたが、それは彼が好んでしていたのではなかった。

- c 句 yātrā「養うこと」訳抜け。

3.2.2 MBh 8.66.1-11

MBh 8.66.1: saṃjaya uvāca |

サンジャヤは言った。

tato 'payātāḥ śarapātāmātram avasthitāḥ kuravo bhinnasenāḥ |

vidyutprakāśaṃ dadṛśuḥ samantād dhanamjayāstraṃ samudīryamāṇam ||

川尻訳：それから、矢に射たれるばかりで遠くに逃げてとどまっていたばらばらのクルの軍勢は、あらゆる方角からアルジュナの武器が光を放って立ち上ってくるのを見た。

修正訳: カウラヴァはそこから敗走して師団がばらばらになっていたが, まだ矢の届く範囲にとどまっていた。彼らはアルジュナの雷光にも似たアストラがあらゆる方向から放たれるのを目にした。

- 川尻氏は 1a *śarapātāmātram* を「矢に射たれるばかりで」と訳すが, 戦^{いくさ}の場面においてこの種の表現は「矢の届く範囲」を表すのが一般的と思われる。この場合 *mātrā* は「範囲」を意味する。Bowles 2008: 463 も修正訳で示した方向でとっている。
- 川尻訳の「光を放って」に対応する原文は 1c *vidyutprakāśam* であるが, *vidyut* 「雷光」が訳に反映されていない。

MBh 8.66.2

tad arjunāstram grasate sma vīrān viyat tathākāśam anantaghoṣam |
krudhena pārthena tad āśu sṛṣṭam vadhāya karṇasya mahāvimarde ||

川尻訳: そのアルジュナの武器は, 終わりのない音を伴って空を往き, 戦士たちを飲み込んだ。その時大戦場で怒れるアルジュナによって放たれた矢は, カルナを殺すためのものであった。

修正訳: そのアルジュナのアストラは, 勇士たちを飲み込み, 轟音を絶えず轟かせながら広大な空をも飲み込んだ。怒るアルジュナは, そのあと即座に, その大合戦においてカルナを討つべく [別の] アストラを放った。

- 川尻氏は 2b *ghoṣa* を単に「音」と訳すが, これだとアルジュナのアストラの凄まじさが伝わらないし, *ghoṣa* の語感にも合わない。「轟音」などが望ましい。
- 川尻氏は 2c *sṛṣṭam* を「放たれた矢」としているが, 「矢」は原文にない。文脈上, 直前に出ている *astra* 「アストラ」を補うべきである。
- 2c *āśu* 「即座に」の訳が抜けている。

MBh 8.66.3

rāmād upāttena mahāmahimnā ātharvaṇenārivināśanena |
tad arjunāstram vyadhamad dahantam pārtham ca bāṇair niśitair nijaghne ||

川尻訳: カルナはラーマから得た, 極めて強力な, アタルヴァ・ヴェーダに由来する, 敵を殺す鋭い矢で, かの燃え上がるアルジュナの武器を破壊し, アルジュナを攻撃した。

修正訳: カルナは, パラシュラーマから得たものとしてアタルヴァン族に由来する, 強力な敵を滅する [アストラ] によって, その燃えるアルジュナのアストラを吹き飛ばした³⁹。そして鋭い矢の数々でアルジュナを攻撃した。

- 「ラーマ」だと事情に通じない読者には誰のことかわからないので, 「ラーマ・ジャーマダグニヤ」や「パラシュラーマ」などとするか, () で説明を補うのが好ましい。

³⁹*dahantam* は普通に見れば強語幹から作られた対格男性形であるから, その場合, d 句にある *pārtham* 「アルジュナを」にかかるのが相応しい。それでも理解可能ではあるが, *dahantam* が c 句にあること, アストラに火力があることとその火を「吹き散らす, 吹き飛ばす」(*vi-dhmā*) ことには連関が認められることから, *dahantam* は c 句の *astram* にかけて訳出した。叙事詩サンスクリットでは, 現在分詞の格変化が強語幹に一般化されることがあるため (Oberlies 2003: 69), 中性名詞 *astram* にかかる現在分詞として弱語幹の *dahat* ではなく強語幹の *dahantam* が使用された可能性は文法的にもありうる。

- 3b ātharvaṇena を川尻氏は「アタルヴァ・ヴェーダに由来する」と訳すが、カルナがここで放っているアストラは呪法集『アタルヴァヴェーダ』に由来するのではなく、それを授けてくれたパラシュラーマに由来する。ここではパラシュラーマが「アタルヴァン族の者」(ātharvaṇa)として意図されている。
- 3c vyadhamad を川尻氏は単に「破壊し」と訳すが、接頭辞 vi-と語根 dhmā「吹く」の意味を生かせば「吹き散らし、吹き飛ばし」あたりが適切である。川尻氏の翻訳にはそれぞれの語が有する語感を無視して意味を過度に一般化する傾向が顕著に認められる（本稿 3.1.1 節も参照）。
- 川尻氏は 3d bānaiḥ niśitaiḥ「鋭い矢の数々で」を上記の vyadhamad にかけているが、それは語順的に不自然であり、bānaiḥ niśitaiḥは 3d nijaghne にかかるのが自然である。そもそも bānaiḥ niśitaiḥは複数形なので、前半部に連なる単数形の形容詞をこれにかけるのは、異常である。通常、サンスクリット語において名詞と形容詞は性数格の一致 (concord) を起こす。神的なアストラに対しては神的なアストラで対抗するのが『マハーバーラタ』の通常型であるから、前半部に連なる形容詞の修飾先として補うべきは直前の詩節で言及されている「アストラ」(astra) がふさわしい。カルナはアルジュナが放った神的なアストラに対して、自らの神的なアストラを放ち、相殺したのである。

MBh 8.66.5-6

tato ripughnaṃ samadhata karnaḥ susaṃśitaṃ sarpamukhaṃ jvalantam |
 raudraṃ śaraṃ saṃyati supradhautam pārthārtham atyarthacirāya guptam ||
 sadārcitaṃ candanacūrṇasāyinaṃ suvarṇanālīśayanaṃ mahāviṣam |
 pradīptam airāvatavaṃśasaṃbhavaṃ śiro jihīṣur yudhi phalgunasya ||

川尻訳：そしてカルナは、敵を殺す、蛇の顔をした、燃える、ルドラのように恐ろしい、丁寧に洗われて、戦いの中でアルジュナ〔を殺す〕ために極めて長い間守られてきた矢を構えた。常に崇拜され、白檀の粉に包まれ、金の矢筒で眠っていた、極めて恐ろしい、燃える、アイラーヴァタ族に生まれた、戦いでアルジュナの頭を吹き飛ばすための矢を。

修正訳：ついで、カルナは戦いの中でアルジュナの頭を取り去ろうとして、一本の矢をつがえた。その矢は敵を殺すものにして、極めて鋭利で蛇の口をして燃え上がり、よく統御され磨きもかかって恐ろしく、アルジュナのために、はなはだ長期に渡って秘蔵されていたものだった。またその矢は、金糸に包まれて白檀の粉の上に置かれ、常に崇拜されていたもので、猛毒にして光り輝き、アイラーヴァタ蛇族の間に生まれたものであった。

- これ以降、カルナが所持していた必殺の蛇矢の話が続く、カルナの蛇矢については本稿 2.17 を参照されたい。
- 川尻氏は MBh 8.66.5-6 をそれぞれ分けて訳出しているが、MBh 8.66.5 で言及される蛇矢に対する修飾は MBh 8.66.6 まで続き、さらに MBh 8.66.6 の最後にはカルナを修飾する表現も出るから、まとめて訳出した方が分かりやすいだろう。
- まず MBh 8.66.5 について。川尻氏は 5c supradhautam を「丁寧に洗われて」と訳すが、あまり洗うと矢は錆びついてしまうのではないだろうか。「よく磨かれた」あたりが意図されていると思われる。よく磨きがかかっているからこそ「極めて鋭利な」(susaṃśitaṃ) 矢なのである。川尻氏はこの 5b susaṃśitaṃ を訳出していない。加えて、5c saṃyati「よく制御された」も訳されていない。その一方で、「戦いの中で」という MBh 8.66.5 の原文に対応するも

のがない訳が入り込んでいる。最後に，5d *guptam* を川尻氏は「守られてきた」とするが，ここで意図されているのは，アルジュナに放つためにずっと大事にとっておいた秘密の矢であるということなので，それを伝えることができる訳語が望ましい。Hiltebeitel 2007: 42 は ‘kept secret’ と訳す。

- 次に MBh 8.66.6 について。6b *suvarṇa-nālī-śayana* の解釈はやや難しい。川尻氏は「金の矢筒で眠っていた」と訳すが，*nālī* に「矢筒」の意味はないため，*suvarṇa-tūṅīra-śaya* という異読あるいはこの異読を採用する先行訳に従っていると思われるが，異読を採用したことは明記されていない。*nālī* は普通「葉の筋，葉脈」を意味するので，それで解釈するとすれば，アルジュナに放つべく蛇矢を大事に保管するにあたって，剣を鞘で包むようにその蛇矢を黄金の葉脈，金糸のようなもので包んでいたと考えることもできる。上でも述べたように（本稿 3.1.1 節），批判校訂版が最終的に採用した読みのもとで解釈できる可能性を最大限探るべきである。
- 川尻氏は 6b *mahāviṣam* を「極めて恐ろしい」とするが，*viṣa* は毒なので「大毒の，猛毒の」である。蛇矢に相応しい形容である。
- 川尻氏は 6d *jihīṣur* を「吹き飛ばすための」とするが，*har/hr̥* 「運ぶ」の意欲活用語幹から作られた形容詞として「取り去ろうとする」あたりが適切と思われる。一番の問題は川尻氏が「吹き飛ばすための矢を」として *jihīṣur* を 5c *śaram* 「矢を」にかけてしまっていることである。前者は主格形，後者は対格形であり，格形の違う形容詞を格形の違う名詞にかけるのは，異常である。*jihīṣur* は主格形として同じ主格形の 5a *karṇaḥ* 「カルナは」にかかる。

MBh 8.66.7

tam abravīn madrarājo mahātmā vaikartanaṃ prekṣya hi saṃhiteṣum |

na karṇa grīvām iṣur eṣa prāpsyate saṃlakṣya saṃdhatsva śaraṃ śiroghnam ||

川尻訳：構えられた矢を見て，偉大な魂のマドラの王はカルナに言った。「カルナよ，この矢は首に届かないだろう。頭を吹き飛ばせる矢を探して射つべきだ」と。

修正訳：マドラ国の偉大なる王（シャリヤ）は，カルナが矢をつがえているのをはっきりと認めて彼に言った。「カルナよ，その矢が首に届くことはないだろう。頭を討ちとる矢を見定めて，つがえよ。」

- 7b *saṃhiteṣum* を川尻氏は「構えられた矢を」と訳すが，同じ 7b にある *vaikartanaṃ* に所有複合語としてかけるのが自然である。
- 7d *saṃdhatsva* を川尻氏は「射つべきだ」と訳すが，この定動詞は *sam-dhā* 「しかと／正しく置き定める」から派生している語として，矢を射ることではなく矢を弓につがえることを意味する。

MBh 8.66.8

- 原文の 8b *saṃdhiteṣuḥ* を川尻氏は「弓を構えた」と訳すが，*iṣu* は「弓」ではなく「矢」である。*iṣu* を「矢」ではなく「弓」と勘違いしている例は 8.66.34 に対する翻訳（川尻 2022: 218）にも見られる。

MBh 8.66.9

- 原文の 9c *hato 'si* を川尻氏は「お前はもう死んでいる！」と訳すが、正確には「お前はもう殺されている！」である。「お前はもう死んでいる！」なら、*mṛto 'si* などの表現が想定される。

MBh 8.66.10–11

saṃdhīyamānaṃ bhujagaṃ dṛṣṭvā karṇena mādhaḥ |
ākramya syandanaṃ padbhyāṃ balena balināṃ varaḥ ||
avagāḍhe rathe bhūmau jānubhyām agaman hayāḥ |
tataḥ śaraḥ so 'bhyahanat kirīṭaṃ tasya dhīmataḥ ||

川尻訳：カルナの構えた蛇〔のような矢〕を見て、強き者の中の強者たるクリシュナは戦車に登り、両足をもってその力で戦車を地面に沈め、膝で馬を止めた。そして矢はかの思慮深き〔アルジュナ〕の冠を貫いた。

修正訳：最上の強者クリシュナは、カルナが蛇矢をつがえているのを目にして、両足で力いっぱい戦車を踏みつけた。戦車が沈み込むと、馬たちは膝のところまで地面に入った。その結果、その蛇矢はかの思慮深きアルジュナの王冠を砕いた。

- 10a から 11b に対する川尻氏の訳「クリシュナは戦車に登り、両足をもってその力で戦車を地面に沈め、膝で馬を止めた」は、全くもって不可能である。まず、動作の主体たるクリシュナは 1a *mādhaḥ* と主格形で提示され、戦車が地面に沈んだことは 11a *avagāḍhe rathe* というように過去分詞の所格形を用いた構文で示されているから、「クリシュナは…その足で戦車を地面に沈め」という訳はあり得ない。
- 次に 11b *hayāḥ* は男性の名詞 *haya* の主格複数形であるから「馬を止めた」と目的語でとるのも不可能である。定動詞の役割を果たす 11b *agaman* は三人称複数形であるから、クリシュナをその動作の主体に設定することもできない。動作の主体は主格複数形 *hayāḥ* で示されている馬たちである。
- 川尻氏は 10c *ākramya syandanaṃ* を「戦車に登り」と訳しているが、クリシュナはアルジュナの戦車の御者であるから、すでに戦車の上にいるはずである。この *ākramya* は「踏みつけた」を意味するのが文脈の上から自然である。10c *padbhyāṃ* 「両足で」はこれにかかる。*ākramya* は絶対詞の形をとっているが、叙事詩サンスクリットによくある語法として、定動詞の役割を果たす (cf. Oberlies 2003: 285–287) . Viethsen 2008: 152 はまさしく上記の修正訳と同じような仕方で当該詩節を訳出している。

3.3 MBh 8.66–67（カルナの死）試訳

以下はカルナの死を描いた箇所（MBh 8.66–67）の評者による翻訳である。この箇所については、よほどのことでない限り川尻訳の不備を逐一指摘することはしない。あまりに重度の不備が見られる場合には、脚注で指摘している。第 66 章を川村、第 67 章を高橋が担当した。訳語や表記の仕方はそれぞれの訳者の方針に従ってなされており、必ずしも統一していない。

3.3.1 MBh 8.66

サンジャヤは言った。

カウラヴァはそこから敗走して師団がばらばらになっていたが、まだ矢の届く範囲にとどまっていた。彼らはアルジュナの雷光にも似たアストラがあらゆる方向から放たれるのを目にした。(1)

そのアルジュナのアストラは、勇士たちを飲み込み、轟音を絶えず轟かせながら広大な空をも飲み込んだ。怒るアルジュナは、そのあと即座に、その大合戦においてカルナを討つべく[別の]アストラを放った。(2)

カルナは、パラシュラーマから得たものとしてアタルヴァン族に由来する、強力で敵を滅する[アストラ]によって、その燃えるアルジュナのアストラを吹き飛ばした。そして鋭い矢の数々でアルジュナを攻撃した。(3)

それから、王よ、そのアルジュナとカルナの間で大激戦が展開された。彼らはまだら色の矢の数々で互いを攻撃し合った。二頭の象が恐ろしい牙の打撃で攻撃し合うように。(4)

ついで、カルナは戦いの中でアルジュナの頭を取り去ろうとして、一本の矢をつがえた。その矢は敵を殺すものにして、極めて鋭利で蛇の口をして燃え上がり、よく統御され磨きもかかって恐ろしく、アルジュナのために、はなはだ長期に渡って秘蔵されていたものだった。またその矢は、金糸に包まれて白檀の粉の上に置かれ、常に崇拜されていたもので、猛毒にして光り輝き、アイラーヴァタ蛇族の間に生まれたものであった。(5-6)

マドラ国の偉大なる王(シャリヤ)は、カルナが矢をつがえているのをはっきりと認めて彼に言った。「カルナよ、その矢が首に届くことはないだろう。頭を討ちとる矢を見定めて、つがえよ。」(7)

するとカルナは怒りで目を真っ赤にし、力強く矢をつがえてシャリヤに言った。「シャリヤよ、カルナが矢を二度つがえることはない。私のような者が騙されることはない。」(8)

そう言うと、カルナは長年崇めてきたその蛇矢を放ち、「お前は殺されたも同然だ！パルグナ(アルジュナ)よ！」と言った。そのようにして、カルナは即座にその強力な矢を放ったのである。(9)

最高の強者クリシュナは、カルナが蛇矢をつがえているのを目にして、両足で力いっぱい戦車を踏みつけた。戦車が沈み込むと、馬たちは膝のところまで地面に入った。その結果、その蛇矢はかの思慮深きアルジュナの王冠を砕いた。(10-11)

アルジュナの頭の飾りは、地、中空、天、水の世界に知れ渡っていたが、それをカルナは、強力なアストラを射出する際の最大の尽力と怒りをもって、矢で頭から取り去った。(12)

その冠は、太陽と月と火と惑星のように輝き、一群の黄金と真珠と宝石に飾られており、世界の刺激者(ブラフマン?)がインドラのために苦行し奮闘して自ら造ったものであった。(13)

価値高い美を誇り、敵たちを恐怖させ、その光は輝き渡り、素晴らしい幸をもたらし、香りの芳しいその王冠は、アルジュナが神々の敵たちを倒したときに、恵み深い神々の主(インドラ)が自らアルジュナに与えたものだった⁴⁰。(14)

⁴⁰川尻訳は 14d *sumanāḥ* 「良い心をした」を、アルジュナを指す 14d *kirīṭine* 「王冠を戴く者に」にかけているが(川尻 2022: 216: 「正しい心のアルジュナに」), *sumanāḥ* は主格形, *kirīṭine* は与格形であるため、前者を後者にかけるのは異常である。かかる先は同じ主格形である 14c *sureśvaraḥ* 「神々の主(インドラ)」である。アルジュナは天界を訪問中、インドラから神聖な王冠を (*divyaṃ . . . kirīṭaṃ*) 授かっている (MBh 3.171.5)。

カルナが蛇矢で激しく取り去った冠は、ハラ（シヴァ）と水の守護者（ヴァルナ）とインドラと富の守護者（クペーラ）といった最高の神々が最上のピナーカ弓と縄とヴァジュラと矢をもってしても⁴¹、砕くことのできないものであった。（15）

地上で愛されていた、アルジュナの最高級の輝く冠は、その最上の矢で振り動かされ、毒という火で燃やされて、落下した。燃えあがる太陽がアスタ山から〔西方へ〕沈むように⁴²。（16）

そうして蛇は、多くの宝石に飾られた冠をアルジュナの頭から力づくで取り去った。大インドラのヴァジュラが、美しい蕾や花をつけた樹々のある最上の頂を山から取り去るように。（17）

大地、中空、天、水界が風で切り裂かれたかに思えるのと全く同様に、バーラタよ、世界中で轟音が鳴り響いた。そのとき人々は、奮起しつつも心かき乱されてよろめいた。（18）

そこでアルジュナは、白い布で髪をしかと結びあげ、かき乱されることなく立ち、輝き渡っていた⁴³。山頂に昇った光溢れる太陽でウダヤ山が輝き渡るように⁴⁴。（19）

そのとき、カルナの腕から飛んで行った、火や太陽にも似た輝きを有し、アルジュナに敵意を抱いていた蛇矢たる大蛇が、冠を落とした後に起き上がった⁴⁵。（20）

蛇はクリシュナに告げた。「クリシュナよ、いま知りなさい。〔アルジュナは〕かつて私に罪を犯した。母を殺されたことからこいつに敵意を抱いているのだ。」⁴⁶それからクリシュナは戦いの中でアルジュナに指示した。「敵意を抱いている大蛇を殺しておけ。」（21）

クリシュナにこう言われ、ガンディーヴァ弓の保持者にして敵たちに強弓を向ける者アルジュナは、述べた。「いま私の〔戦う〕この蛇は一体何者か。自らガルダ鳥の口に入り込んできたこの蛇は。」（22）

クリシュナは述べた。

⁴¹ピナーカ弓と縄とヴァジュラと矢はそれぞれ順番通りシヴァ、ヴァルナ、インドラ、クペーラの武器として意図されている。ヴァジュラは後の時代には雷撃と解されることが多いが、もともとは棍棒・戦棍である。

⁴²8.13.19cd に *tac chonitābhaṃ nipatad vireje divākaro 'stād iva paścimām diśam* 「それ（地面に落ちらダンの頭）は血で輝き、落ちていながらも輝き渡っていた。アスタ山から西方へ沈んだ太陽のように」という表現があることを根拠として、「アスタ山から沈んだ」（当該の MBh 8.66.16）または「アスタ山から」（MBh 8.67.24）は「アスタ山から西方へ沈んだ」の省略表現として解する。

アスタ山 (*asta*) は太陽が沈むとされる西の山である。*asta* という語は普通名詞としては「家、すみか、故郷」を意味し、*astam eti* 「家へ帰る」という言い方でもって太陽が家に帰ること、すなわち沈むことを意味する。用例はすでにヴェーダ文献からある（後藤 1991: 980）。

⁴³川尻 2022: 216: 「... アルジュナは、光に満ちて輝いているようだった」について、「光に満ちて」に対応するのは 19c *saṃpūrṇamarīci-* しかないが、この語は 19c *saṃpūrṇamarīcibhāsvatā* 「光溢れる太陽によって」という複合語の一部なので、その部分だけを取り出して 19b *arjunaḥ* という主語にかけることはできない。また、19d *śirogatenodayaparvato* を「ウダヤ山の山頂が」と訳すのも無理である。

⁴⁴ウダヤ山 (*udaya*) は太陽が昇る東の山である。*udaya* という語は一般名詞として太陽の「上昇」を意味することもある。ここではアルジュナがそのようなウダヤ山に喩えられており、以下に出る詩節で太陽が沈むアスタ山と関連づけられるカルナと対極をなしている。

⁴⁵川尻 2022: 216 は 20d *samutpapāta* を「落ちた」と訳すが、*-ut-*があるので明確に「起き上がった」である。

⁴⁶川尻 2022: 216 は 21a *tam abravīd* を「〔蛇はカルナに〕言った」とするが、蛇の台詞中に「クリシュナよ」という呼びかけが出てくるから、21a *tam* の指示対象は明らかにクリシュナである。また 21a *viddhi kṛtāgasam me* を「わたしをかつて誤ったものと知れ」と訳すが、*kṛtāgasam* と *me* は格形が異なるので、この訳は異常である。そもそもアルジュナに復讐しようとする蛇が「かつて誤ったもの」とは、一体どういうことだろうか。同じく川尻 2022: 216 は 21b *kṛṣṇa* を「クリシュナは」と訳すが、この語は呼格形なので「クリシュナよ」である。そもそも川尻 2022: 216–217 のように「今やクリシュナは母を殺したことから敵なのだ」としてしまうと、蛇がアルジュナに復讐しようとしている場面と齟齬をきたしてしまう。

「弓取りたるあなたがカーンダヴァの森でアグニ神を喜ばせたとき，この蛇は一つならざる姿で空へ逃げたが，あなたはその体を矢で切り裂き，彼の母の方をあなたは殺したのだ⁴⁷。」(23)

それからアルジュナは，真斜^{まなな}めに空へと飛びあがった蛇を⁴⁸，他のことは排して切っ先の鋭い六本の矢だけで切り裂いた⁴⁹。その蛇は体を切り裂かれて地に落ちた⁵⁰。(24)

その瞬間カルナは，横目で見てくる人中の優れた英雄アルジュナを，石で研がれ孔雀の羽で飾られた十本の矢で射た⁵¹。(25)

するとアルジュナは，十二本の鋭い矢を耳のところから放ってから⁵²，毒蛇と等しい勢いをした鉄製の矢を，耳のところまで十分に引き絞って射出した。(26)

正しく放たれたその最上の矢は，命を消し去るかのようにカルナの色彩豊かな鎧を砕き⁵³，カルナの血を飲んでから，その羽根まで血に染まって，大地に突き刺さった。(27)

すると益荒男（カルナ）は，矢で射られたことに対してまるで棒で叩かれた大蛇のように怒り，素早く行動する者として，最上の矢の数々を放った。大毒の蛇が最強の毒を飛ばすように⁵⁴。(28)

クリシュナを十二本の矢で，アルジュナを九九本の矢で引き裂き，さらに恐ろしい一本の矢でアルジュナを切り裂いてから，カルナは咆哮し，笑い声をあげた。(29)

アルジュナはそうやってカルナが歓喜しているのに我慢がならなかった。そこで，急所を知るアルジュナは，カルナの諸々の急所を切り裂いた。インドラに等しい勇力を備えるアルジュナは，羽根つきの矢の数々で敵（カルナ）を攻撃した。インドラがその力をもって悪魔バラを攻撃したように。(30)

次いでアルジュナは，死神の杖のごとき九十九本の矢をカルナに向けて放った。カルナは矢の数々で体を激しく痛めつけられて，ぐらついた。ヴァジュラに砕かれた山のように。(31)

⁴⁷蛇アシュヴァセーナは，彼を守ろうとする母親の蛇に飲み込まれて空へ逃げたが，アルジュナはその母蛇の頭を落とす (MBh 1.218.8)。当該詩節によれば，母が攻撃されたとき（あるいはその後），息子アシュヴァセーナの方も攻撃を受けていたようである。

⁴⁸当該の iva は eva と同じ意味合いで eva の代わりに使われていると思われる (cf. Oberlies 1997: 16)。

⁴⁹24a parihr̥tya śeṣāṃś の解釈がやや難しいが，残りの者たち（蛇以外の他の敵たち）は気にも留めずに，蛇だけに一点集中して，という意味で解した。川尻 2022: 217 は「残りを殺してから」と訳すが，どのような意味を想定したのだろうか。

⁵⁰川尻 2022: 217 は 23d anekarūpo nihatāsyā mātā を「殺されたものは一匹ではなく，彼の母親だったのだ」と訳すが，anekarūpo は男性主格形，mātā は女性主格形なので前者を後者に対する形容詞のように解するのは，異常である。anekarūpo は 23a yo 'sau にかかる。

⁵¹川尻 2022: 217 は当該詩節を「その時，人中の最高の英雄カルナは，十本の鋭く研がれて孔雀の羽根で飾られた矢で，アルジュナを横目に見ながら攻撃した」と訳す。まず 25c puruṣapṛavīraṃ 「人中の優れた英雄」は対格形であるから，25c karnaḥ 「カルナは」ではなく 25d dhanamjayam 「アルジュナを」にかかる。また「石で」(śilā-) の訳抜けが抜けている。さらに 25d avekṣamānam を「アルジュナを横目に見ながら」と訳してカルナにかけているが，これも対格形であるから，カルナではなくアルジュナにかかる。異なる格形をした修飾語を異なる格形をした名詞類にかけてしまうと，サンスクリット語原典の意味するところからは大きく逸脱してしまうことになる。川尻訳にはこの種の初歩的な誤りが非常に多い。

⁵²耳のところまで (ākṛṇam) 引き絞った弓で放つという意味である。

⁵³川尻 2022: 217 は「かの最上の矢は貫き，…放たれた」という訳を提示するが，矢が貫いてから放たれた，だと時間的な順序が逆である。矢は放たれてから貫いたのである。

⁵⁴川尻 2022: 218 は「最強の毒を持つ蛇のような最高の矢を放った」という訳を提示するが，28d mahāviṣaḥ sarpāḥ 「大毒の蛇が」は主格単数形であるため，28c śarottamān 「最上の矢の数々を」という対格複数形にかけるのは異常である。

最良の宝石と最高質の金剛と黄金で飾られたカルナの頭部の装飾は、羽根つきの矢の数々でアルジュナによって貫かれ、大地に落下した。カルナの最高の両耳飾りも。(32)

優れた職人らが長い時間をかけて丹念につくりあげた、高価で輝かしい最高級のカルナの鎧を、アルジュナは矢の数々をもって一瞬でばらばらにした。(33)

そして怒れるアルジュナは、鎧の砕かれたカルナを四本の最上の矢で切り裂いた⁵⁵。敵（アルジュナ）に激しく攻め立てられてカルナはたじろいだ。病人が胆汁素・粘液素・体風素そして傷によって悩まされるように。(34)

アルジュナは、行為への専心のもと強弓の円形部から力強く放たれた鋭い最上の矢の数々で、カルナを切り刻んだ。さらにアルジュナは手を休めずにその諸急所をも貫いた。(35)

勢いよく飛んでくる、切っ先の鋭い多様な羽根つきの矢でアルジュナに激しく射られて、カルナは、赤墨の鉱石で赤く、滝の数々で赤い水を流す山のように見えた⁵⁶。(36)

バーラタよ、アルジュナは仔牛の歯型の矢の数々で馬と戦車もろともカルナを覆い尽くした。また、全身全霊をもって、黄金の羽のついた矢の数々で諸方を覆った。(37)

広く厚い胸をしたカルナは、仔牛の歯型の矢の数々に覆われて、花咲き誇るアショーカ樹・パラージャ樹・シャルマリ樹とスパンダナ樹・チャンダナ樹の生える山のように見えた⁵⁷。(38)

王よ、戦いの最中、カルナは体に多く受けた矢の数々で、山頂や谷間を樹々に覆われ、美しいカルニカーラ樹に満ちたマヘンドラ山脈のように見えた。(39)

そこでカルナは一群の矢を弓で射出し、矢の集まりの光輝をもって輝き渡った。アスタ山に向かう⁵⁸、赤い光輪をまとう真っ赤な太陽のように⁵⁹。(40)

アルジュナの腕から放たれた切っ先の鋭い矢の数々は、諸方へと散りながら、カルナの腕の湾曲部から放たれた輝く大蛇のごとき矢の数々を粉碎した⁶⁰。(41)

⁵⁵川尻 2022: 218 は 34a *uttameṣubhiḥ* を「最高の弓で放った」と訳すが、*iṣu* は「弓」でなく「矢」である。

⁵⁶カルナの体が血に染まり、かつ体から血が流れ出ていることを示す比喩と解することができる。

⁵⁷当該詩節ではカルナが山に、カルナに刺さった矢の数々が山に生える樹々に、矢についた血が樹になる赤みがかかった花々に喩えられている。『マハーバーラタ』において、とりわけアショーカ樹の花の赤さは血の赤さの喩えとして言及される (Sharma 1964: 81)。花々は一般に血の色を象徴するものとして描かれる (Sharma 1964: 83)。

⁵⁸アスタ山については脚注 42 を見よ。ここでカルナが、西方のアスタ山へと沈んでいく太陽に喩えられていることから、カルナの死期が迫っていることが暗示されていると言える。

⁵⁹川尻 2022: 219 は「カルナは多くの矢を弓で放ちながら、矢の網でできた光線のようにあり、赤い円盤は赤い光線のようにであった。太陽がアスタ山に向かうように」という訳を提示しているが、まずカルナが「矢の網でできた光線のように」とは一体どういう意味だろうか。複合語の最後についている所有接辞 *-vat* も無視されている。40bc [*vibhāti . . .*] *salohito raktagabhastimaṇḍalo* に対応する川尻訳は「赤い円盤は赤い光線のようにであった」のようだが、どうやってこのような訳にたどり着いたのか理解し難い。*salohito* 「真っ赤な」と *raktagabhastimaṇḍalo* 「赤い円輪をまとう」の二語は後続する 40d *divākaro* 「太陽」にかかる形容詞である。

⁶⁰川尻 2022: 219 は「カルナのもう一本の腕から放たれた、輝く大蛇のような矢を、アルジュナの腕から放たれた矢は撃ち落とし、四方は白い棘で覆われた」と訳すが、まず 41a *bāhvantara* は「もう一本の腕」ではなく、「腕の隙間」、すなわち弓を引き絞ったときにできる腕の湾曲部を指す (cf. Hildebeitel 2007: 45: ‘the bend of Adhiratha’s son’s arms.’)。また、また「四方は白い棘で覆われた」とするが、*śita* は「白い」ではなく「鋭い」である。*sita* 「白い」と勘違いした可能性がある。41d *śitāgrāh* は「白い棘」ではなく「先端／切っ先の鋭い [矢]」である。

すると、カルナの一つの車輪が地中にはまった⁶¹。バラモンの呪いで戦車が右往左往し⁶²、またパラシュラマから授かったアストラが閃き出ないことを受けて、戦いの最中その御者の子（カルナ）は動揺した。（42）

そのような悪運の数々に耐えられず、両手を振りながら、カルナは悪態をついた。「法を知る者たちは『法を第一とする者たちを法は守る』といつ何時も言っていたが、今日、私にとってすら法は沈んでしまった。法は献身者たちを守っていない。思うに、法は必ずしも守ってくれるものではない。」と。（43）

このように言っているとき、カルナの馬と御者はよろめき、カルナ本人はアルジュナの矢に打たれて振り動かされ⁶³、急所も攻撃されてその行動は安定を欠いていたが、カルナは戦闘中に繰り返し法を非難し続けた。（44）

それからカルナは、戦いの最中、より恐ろしい三本の矢でアルジュナの手を射て⁶⁴、アルジュナ [の胴体] にも七本の矢を射掛けた。（45）

対してアルジュナは、インドラの雷撃に等しく、炎にも似た、切っ先の鋭い真っすぐに飛ぶ一七本の恐るべき矢を放った。（46）

それら恐ろしい勢いの矢の数々は [カルナを] 貫いて地面に刺さった。カルナは胴体がぐらつきながらも力の限り動いてみせた。（47）

そこでカルナは力を入れて踏ん張り、梵天のアストラを現出させた。アルジュナはそれを見て、インドラ神のアストラを呼び寄せた。（48）

アルジュナはガンディーヴァ弓と弦と矢の数々に次々と呪句を唱えかけ⁶⁵、矢の雨を放った。都城の破壊者（インドラ）が雨を降らせるように。（49）

すると、アルジュナの戦車から放たれた、光熱と勇力にあふれる矢の数々が、カルナの戦車の近くに現れた。（50）

しかし大戦士カルナは眼前に放たれたそれらの矢を無効化した。そのアストラが消滅させられたとき、クリシュナが指示を出した。（51）

「より高次のアストラを解き放て、パールタ（アルジュナ）よ！⁶⁶ラーデーヤ（カルナ）⁶⁷は矢

⁶¹川尻 2022: 219 は 42a cakram apatat tasya bhūmau を「円盤が地上に落ちて」と訳す。まず tasya「彼（カルナ）の」の訳が抜けている。次に cakra を「円盤」と訳すが、ここはバラモンの呪い（本稿 2.18）が実現して車輪が地面に飲み込まれようとする場面の序奏であり、cakra は明確に「車輪」である。

⁶²地中にはまった車輪は単数形で表されているので、別の車輪は地中にははまっておらず、その車輪をもって戦車が右往左往していると解した。

⁶³川尻 2022: 219 は「アルジュナの武器に打たれた馬と御者を押しのけて」という訳を提示するが、44b arjunaśastrapātaiḥ「アルジュナの武器に射られて」を複合語中にある 44a -aśvasūto「馬と御者」の部分に形容詞のようにかけるのは、異常である。

⁶⁴川尻 2022: 220 は「カルナは...手を攻撃され」という訳を提示するが、45d avidhyat は受動形ではない。カルナがアルジュナに手を攻撃されたのではなく、カルナがアルジュナの手を攻撃したのである。

⁶⁵ここでは mantrīya「呪句を唱えて」に「順に」を意味しうる anu-がついているため、弓を手にし、弦を引き、矢を射出するなかでこれら弓、弦、矢に順番に呪句を唱えかけていることが想定される。川尻 2022: 220 には 49a bāṇāmś ca「矢の数々に」の訳が抜けている。

⁶⁶パールタ (pārtha) は「プリターの子」を意味する。プリターはアルジュナの母クンティーのことである。

⁶⁷ラーデーヤ (rādheya) は「ラーダーの子」を意味する。ラーダーはカルナを育てた母である。ここではアルジュナが「プリターの子」、カルナが「ラーダーの子」と呼ばれ、母称 (metronymic) が併記される形となっている。

の数々を飲み込んでいる⁶⁸。」そこでアルジュナは梵天のアストラに正しく呪句を唱えて、[矢と]合体させた。(52)

それからアルジュナは矢の数々でカルナを覆って困惑させた。カルナは怒り、切っ先の鋭い矢の数々でアルジュナの弦を断ち切った。(53)

するとアルジュナは別の弦を張ってぬぐってから、幾千と重ねて輝かしい矢でカルナを覆った。(54)

カルナは、アルジュナが戦いの中で弦を切り取るのも弦を張るのも、そのあまりの速さから認識できなかった。それはもう奇跡というほかなかった⁶⁹。(55)

カルナはアルジュナのアストラの数々をアストラの数々で迎撃した。カルナは自らの勇力を示しながら、アルジュナの上をいった。(56)

クリシュナはアルジュナがカルナのアストラに苦しめられているのを見て、「放て！」とアルジュナに指示した。「これ以上ないアストラを用いよ！」(57)

そこでアルジュナは、火のように見え蛇毒にも匹敵する、鉄製の神的な別の矢に呪句を唱えかけ、ルドラ神のアストラを出して、放とうとした⁷⁰。すると、大戦の只中で大地がカルナの車輪を飲み込んだ。(58-59)

カルナは車輪を飲み込まれて、怒りから涙を流し、アルジュナに言った。「しばし待て、パーンダヴァよ⁷¹。」(60)

「パールタよ、運命によって私のこの車輪が地中に飲み込まれたのを認め、臆病者が受け入れられるような企てを避けよ。」(61)

「アルジュナよ、髪が乱れている者、顔を向けていない者、バラモン、合掌している者、寄る辺を求めてやってきた者、武器を置いた者、不幸の最中にある者、矢が尽きた者、鎧の落ちた者、武器を落としたか武器が壊れた者、このような者たちに対して勇士たる者は戦いにおいて攻撃を仕掛けないのである。王たちが王に攻撃しないのと同じである⁷²。そしてあなたは勇士に他ならない、カウンテーヤよ⁷³。ゆえに、ほんの少しでいいから待たれよ。」(62-63)

⁶⁸「飲み込んでいる」(grasate)は単純に矢を無効化していることを表しているとも解せるが、インドラ神のアストラの光熱力(tejas)を纏った矢の数々から、その光熱力をカルナが吸収していることを述べたものとも解しうる。このような「光熱力」(tejas)の概念についてはWhitaker 2000を見よ。

⁶⁹川尻 2022: 221 は 55d adbhutam ivābhavat を「まるで[切れた弦など]存在しないかのように素晴らしかった」とするが、ivaは位置的に abhavat ではなく adbhutam にかかるのが普通である。また、abhavat は現在分詞ではなく直説法過去の定動詞形である。この「もう奇跡というほかなかった」(adbhutam ivābhavat)というのは、『マハーバーラタ』中にしばしば見られる定型句である (cf. Hildebeitel 2007: 46: 'That was like a wonder'; Bowles 2008: 495: 'It was quite miraculous!'). iva はしばしば eva の代わりに使用される (Oberlies 1997: 16)。

⁷⁰川尻 2022: 221 は 59b kṣeptukāmah を「[カルナを]滅すことを望んだ」と訳すが、語根 kṣip は「滅す」ではなく「放つ」である。語根 kṣi と勘違いした可能性がある。

⁷¹パーンダヴァ (pāṇḍava) は「パーンドウの子」を意味するアルジュナの異名であり、パーンドウはアルジュナの名目上の父である。これ以降カルナはさまざまな名称を用いてアルジュナに呼びかけ、説得しようとする。六一では「パールタ」(pārtha)、六二では「アルジュナ」(arjuna)、六三では「カウンテーヤ」(kaunteya)、六四では「ダナンジャヤ」(dhanamjaya)と「パーンダヴェーヤ」(pāṇḍaveya)、六五では「パーンダヴァ」(pāṇḍava) というように、異なる名称が次々に用いられる。

⁷²63d rājñe は与格形であるが、叙事詩サンスクリットでは、(矢による)攻撃の対象はしばしば与格形で現れる (Meenakshi 1983: 78-79)。川尻 2022: 222 はこの箇所を「王位にある」と訳すが、rājñe をこのように訳すのは不可能であり、rājye と勘違いした可能性がある。

⁷³カウンテーヤ (kaunteya) は「クンティーの子」を意味するアルジュナの異名である。

「私がこの車輪を大地から引き上げるまで、ダナンジャヤよ⁷⁴、戦車に乗っているあなたが地上にいる無防備な私を攻撃しないでほしい。私はヴァースデーヴァ（クリシュナ）⁷⁵やお前を恐れているわけではない。パーンダヴェーヤよ⁷⁶。」（64）

「実にあなたは王族の子にして偉大なる家系を繁栄させる者だ。法^{ダルマ}の教えを思い出し、しばし待たれよ、パーンダヴァよ。」（65）

3.3.2 MBh 8.67

サンジャヤは言った。

そして戦車に乗ったヴァースデーヴァ（クリシュナ）は言った。「ラーダーの子（カルナ）よ、君がここで法^{ダルマ}を思い出すとは幸福なことだ。卑き者は、苦難に沈んでいるとき、たいてい運命を責めるが、あれこれの〔自身の〕悪行を責めることはない。（1）

君とスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）、ドゥフシャーサナ、スバラの子（シャクニ）^{ダルマ}が布一枚のみをまとったドラウパディーを集会場に連れてきたとき、カルナよ、君の法はその場に出現することはなかった。（2）

集会場において、賭博に明るいシャクニが、クンティーの子で、賭博に暗いユディシティラを負かした時、君の法^{ダルマ}はどこにいったのだ。（3）

集会場において、月経中のクリシュナー（ドラウパディー）がドゥフシャーサナのなすがままになったのを君が笑った時、カルナよ、君の法^{ダルマ}はどこにいったのだ。（4）

さらにカルナよ、王権に目がくらんで、ガンダーラ王（シャクニ）をたよって、パーンドウの子（ユディシティラ）を〔賭博で打ち負かそうと集会場に〕呼んだ時、君の法^{ダルマ}はどこにいったのだ。（5）

（サンジャヤは言った⁷⁸。）

一方、ラーダーの子（カルナ）がヴァースデーヴァ（クリシュナ）にそのように言われている時、ダナンジャヤ（アルジュナ）はあれこれのことを思い出し、激しい怒りにおそわれた。（6）

⁷⁴ダナンジャヤ（dhanamjaya）は「富を勝ち取る者」を意味するアルジュナの異名である。

⁷⁵ヴァースデーヴァ（vāsudeva）は「ヴァースデーヴァの子」を意味するクリシュナの異名である。

⁷⁶パーンダヴェーヤ（pāṇḍaveya）は「パーンドウの子」を意図するアルジュナの異名である。「パーンドウの子」を意味する通常の語は三音節のパーンダヴァ（pāṇḍava）であるが、四音節のパーンダヴェーヤ（pāṇḍaveya）は韻律上より多くの音節を満たす形でパーンダヴァと同じ意味において使用される（Hiltebeitel 2007: 69, n. 143）。

⁷⁷ここでは、社会規範に基づいた道徳的な態度や行いのことを示すと思われる。

⁷⁸多くの写本（Ś1, 2 K1-4 V1 B3, 4 Da1 D1, 3-7）では、第5詩節と第6詩節の間に samjaya uvāca 「サンジャヤは言った」という話者情報提示文が挿入されている。直後の 6ab における、evam ukte tu rādheye vāsudevena 「ラーダーの子がヴァースデーヴァによってそのように言われている時」という言葉から、話者が変更されていることが分かるため、このような話者情報提示文は必ずしも必要であるというわけではない。批判校訂版ではこのように、本文中に話者の転換が示唆されており、かつ全ての写本で話者の提示がなされていない場合には、基本的には話者情報提示文は校訂テキストには組み込まれていない。このような話者情報提示文が本来の『マハーバーラタ』にあったのかどうか、あるいは伝承過程においていつ頃挿入されるに至ったかについては不明な点が多い。批判校訂版における話者情報提示文の問題点については、Takahashi 2021a を参照。

川尻訳では批判校訂版のテキストのみが訳され、このような話者の転換を示す文言は挿入されていないが、『マハーバーラタ』の批判校訂版に普段から慣れ親しんでいない一般読者が話の展開を追うには、相当の注意力が必要である。本書でもこのような話者の転換を示す文言を適宜挿入しても良かったのではないかとと思われる。

怒りから、彼のあらゆる体孔から威力の輝きが現れ出たのだ、大王（ドリタラーシトラ）よ、それはもう奇跡というほかなかった⁷⁹。（7）

カルナはそのような彼（アルジュナ）をみて、ダナンジャヤ（アルジュナ）にブラフマーストラによって[矢の]雨を降らせ、もう一度馬車を（窪みから）持ち上げようとした。その[カルナの]アストラを[自身の]アストラで防ぎながら、パーンドゥの子（アルジュナ）は彼（カルナ）に攻撃した。（8）

それからクンティーの子（アルジュナ）は、カルナに狙いを定めて、ジャータヴェーダス（アグニ）愛用のもう一つのアストラを放った。それは激しく燃え上がった。（9）

するとカルナはその火をヴァルナの[アストラ]⁸⁰によって鎮めた。そして彼は雲の帷を張り、一面を真っ暗にして雨を降らせた⁸¹。（10）

すると勇敢なパーンドゥの子（アルジュナ）は動揺することなく、ラーダーの子（カルナ）が見ている前で、雲を風神のアストラ⁸²によって払い除けた。（11）

矢と共にある彼の旗は、象の腹帯が結えられた⁸³最上のもので、金・真珠・宝石・ヴァジュラが施され、最上の職人が時間と労力をかけて集中力を注いで作ったものであった。それはとても美しく、ことごとく闇を払い除けるものであり⁸⁴、君の軍隊（カウラヴァ軍）の士気を常に高め、敵たちを震え上がらせ、その美しさは讃えられるべきほどのものであった。太陽にも匹敵する者（カルナ）の旗は世間において有名で、その輝きにおいて火・太陽・月にも匹敵した。すると、冠をいただく者（アルジュナ）はしかと構えて、金の矢羽の施された鋭い矢によって、アディラタの子（カルナ）の繁栄に輝く旗を打ち落としたのである。偉大な彼（アルジュナ）が、アディラタの子である大將軍（カルナ）の[旗を打ち落としたのである]。（12-14）

⁷⁹tad adbhutam ivābhavat. 特に形容詞にかかって、不定の意味を表す *iva* については Brereton 1982 を参照。

⁸⁰ヴァルナは水神であり、ここでは水で火を制したということであろう。

⁸¹10cd を直訳すると、「そして彼は雲たちによって全方向を暗く、悪天候にした」となる。「悪天候」(*durdina*) の場合、降雨と曇天といった様々な場合が考えられるが、ここでは水で火を制したということが意図されていると考えられることから、降雨の場合で解釈した。

⁸²vāyavyāstra. ここでは風で雨雲を吹き飛ばした、ということを示していると思われる。川尻訳では「ヴァーヤヴィヤの武器で」とされているが、一般読者にはこのアストラが風に関するものであること翻訳から読み取るのは難しく、若干不親切であるように思われる。

⁸³カルナの旗の竿頭には、「象の腹帯」(*hastikakṣyā*, *nāgakakṣyā*, *hastikakṣa*)があるとされるが(MBh 4.50.15)、具体的にカルナの旗がどのようなものなのか、明確なことはわからない。可能性としては、(1)カルナの旗の竿頭に象の腹帯が結えられているか、(2)カルナの旗の幟には象の腹帯をモチーフにした意匠が施されている、といったことが考えられるが、MBh 4.50.15 の原文をそのまま読めば(1)の方が可能性としては高いと思われるため、上掲訳では「象の腹帯が結えられた」と訳している。

古代南アジアでは象の頭部には「象の真珠」(*gajamuktā*) と呼ばれるものがあり、獅子象が殺すと獅子の爪の隙間にその象の真珠が付着するとされ、象の真珠が獅子とともに言及される場合には、獅子の力強さを象徴する(*Kumārasambhava* 1.6 を参照)。このように象の部位の一部を身に纏っていることが武勇の一つの象徴であることを考えると、カルナの旗印となっている象の腹帯も、獅子の爪の間に付着した象の真珠と同様、カルナが戦闘において多くの戦象を殺すほどの武勇を備えていることを象徴していると思われる。なお南アジアにおける象兵の歴史と、象兵を用いた兵法の地中海世界への伝播に関する最新の研究としては Trautmann 2015 がある。

また、MBh 8.63.68 では、アルジュナとカルナの戦いにおいては旗印同士も戦っているとされ、アルジュナの旗印である猿が、(象の)腹帯に飛びついて、腹帯を爪と牙で攻撃する様が、ガルダ鳥が蛇を攻撃する様に喩えられている。カルナの旗印である、象の腹帯が蛇に喩えられているのは、いくつかの象徴的な意味が含まれていると思われる。この詩節は、第一に象の腹帯が蛇のように細長いことを示すと同時に、第二に *hastikakṣyā* 「象の腹帯」は *nāgakakṣyā* とも呼ばれるが、*nāga* には象と蛇と二つの意味があり、一種の言葉遊びを含み、さらにこれは若干の読み込み過ぎかもしれないが、カルナは蛇矢を用いていることを考えると、蛇矢を用いるカルナがアルジュナに負かされることを象徴している可能性もある。カルナと蛇の象徴の関係については Schulman 1985: 386 を参照。

⁸⁴ここでは、*uccaiḥ* 「いやたかく、非常に」は *vitamaskam* にかけて理解した。

そのとき、陛下（ドリタラーシトラ）、その旗とともに、名声も^{ダルマ}法も勝利もあらゆる好ましいものも、そしてカウラヴァ族たちの気概も、地面に落ちてしまった。そして、「ああ」という大きな嘆き声があがった。(15)

それからパーンドゥの子（アルジュナ）はカルナを殺そうと急ぎ、大インドラのヴァジュラやアグニの杖⁸⁵にも似た、アンジャリカ（矢の一種）を矢筒から取り出した。それは千の光線を有する〔太陽〕の、最上の光線のような⁸⁶。(16)

〔そのアンジャリカは〕急所を穿ち、血肉が付着し、アグニの輝きにも似て、非常に高価で、人・馬・象の命を奪い、三腕分の長さで、六つの矢羽が施され、真っ直ぐ恐ろしい速さで飛ぶものだった。(17)

それは威光において千眼の神（インドラ）の雷にも等しく、屍肉を食らう〔悪魔〕が一同に会したかのように⁸⁷耐え難く、ピナーカ弓⁸⁸やナーラーヤナのチャクラのように恐ろしく、生類を絶滅させるものだった。(18)

〔アンジャリカ矢を〕最上の大アストラに合体させて、呪句に通曉した⁸⁹〔アルジュナ〕はガンディーヴァ弓を引いて、大声で言った。「大アストラを備えた無敵の矢⁹⁰がここにつがえられた。この矢は、邪悪な者の体を切り裂き、命を奪う。私は苦行を行い、師匠たちを喜ばせ、友たちの望みを聞いた—この真実にかけて⁹¹、入念に鍛錬された私のこの無敵の矢は、敵たるカルナを殺せ」と。(19-20)

そう言って、ダナンジャヤ（アルジュナ）はその恐ろしい矢を、カルナを殺害するために放った。その矢は、戦場の死神にすら耐え難い、アタルヴァ・アンギラス族の作り出す、輝く恐ろしい魔女⁹²のような⁹²。(21)

王冠をいだいた彼（アルジュナ）は、いたく喜んでその矢に対して、「この私の矢は勝利をもたらすものであれ。〔カルナを〕まさに殺さんとし、太陽と月のように強力なこの〔矢〕は、カルナをヤマ神のところ（死者の世界）に至らしめるのだ」と言いながら、(22)

⁸⁵アグニの杖が具体的にどのようなものなのかは不明。

⁸⁶川尻訳 (p. 224) では、「アンジャリカは一〇〇〇の光を持つ一つの光のような⁸⁶」とあり、「一〇〇〇の光を持つ」存在と「一つの光」とが同一の存在として訳出されているが、千の光を有する一つの光というのは論理的に矛盾している。また、サンスクリット語において通常属格関係が同一性を示すことは非常に稀である。また「一〇〇〇の光を持つ」といって、それが太陽であることを認識することができる一般読者はどれほどいるだろうか。

⁸⁷samānakravyādam. samāna を「すべての」という意味で kravyāda 「屍肉を食らう〔悪魔〕」にかかる形容詞として理解したが、この複合語は、samāna を kravya にかけて、「あらゆる屍肉を食らう〔悪魔〕」と理解することも可能である。

⁸⁸シヴァの武器の一つ。

⁸⁹mantravid. 神器を射出する際には、通常呪句を伴う (川村 2023: 259)。またここで言う呪句とは、19c-20d におけるアルジュナの言葉のことを指しているようである。

⁹⁰mahāstro 'pratimo . . . śaraḥ. mahāstro は Bahuvrīhi 複合語として、śaraḥ にかかっていると理解した。astra は通常中性なので、男性形の mahāstro を「偉大な武器」というように Tatpuruṣa 複合語として理解することは難しい。アストラは通常の矢と合体させて発射することについては川村 2023: 259 を参照。

⁹¹anena satyena. 原 1979: 9-10 はこの詩節を真実語 (satyakriyā, satyavacana) の例の一つとして言及し、「人は布施、祭祀, tapas, 孝行などにかけて、天地神明に己が欲するところの成就を祈念した」としている。satyakriyā についての最近の研究としては原 2013 がある。

⁹²「魔女」kṛtyām. 「呪術」と理解することもできる。ここでは、「輝く」とされていることから呪術のような抽象的な動作ではなく、呪術の結果としての何らかの実体を伴ったものを指す可能性が高いため、Hiltebeitel 2007: 49 に従って、「魔女」とした。また必ずしも「魔女」である必要はなく、雌の魔物を指している可能性もある。

王冠を抱いた彼（アルジュナ）は喜んだ様子で、その勝利をもたらし、太陽と月のように輝く最上の矢をつがえて弓を引き、カルナをまさに殺そうと⁹³、敵（カルナ）を制止させた。（23）

その時、朝日のように輝き、秋空の天心をいく太陽のような敵将の頭が大地に落ちた—ちょうど赤い日輪をいだいた太陽がアスタ山から [西方へ沈むように]。（24）

そのとき、その行動が非常に高尚な⁹⁴彼の魂が、いつも安楽に育てられた、美しい⁹⁵体を離れるには多くの苦勞を要した⁹⁶—ちょうど非常に裕福な家主が執着していた家を [離れるには多くの苦勞を要するように]。（25）

鎧を破られたカルナの長身の体は、矢によって切り刻まれ、生命を失って [大地に] 倒れた。その傷口からは血が流れていた—ちょうど雷に打たれた山頂から赤土の溶けた水が流れるように。（26）

そしてほどなくして、倒されたカルナの体から現れた輝く光が、空に帰入した。カルナが死んだときのその驚くべきことを、王よ、あらゆる人々、戦士たちが目撃した。（27）

ソーマカ軍 [の将校たち]⁹⁷は、彼が殺されて倒れているのを見て、満足して兵たちとともに歓声をあげた。彼らは喜んで楽器を打ち鳴らし、腕 [を振り回して] 衣服を振り回した⁹⁸。力強く踊り、お互いに抱き合いながら歓声を上げる者たちもいた。（28）

ちょうど夜明けの祭式の終わりに火壇において強風によってかき消される祭火のように、カルナが矢によって馬車から射打ち落とされて、地面でうめき声をあげているのを、彼らは見た⁹⁹。（29）

矢に全身が覆われ、血を垂れ流すカルナの体は輝いていた、太陽が自身の光線によって輝くように。（30）

⁹³jighāmsur. ここではアルジュナに対して用いられているが、22c では矢に対して用いられており、アルジュナと矢の一体感が表現されている。

⁹⁴udāra karmaṇaḥ. udāra を「高尚な」ではなく、「高慢な」という意味で理解することもできるが、udāra は通常肯定的な意味で用いられることが多く、この詩節ではカルナに対して否定的な言葉を並べつつも、彼を称賛する言葉を織り交ぜることで、カルナに対する複雑な評価が込められていると解釈した。

⁹⁵surūpaṃ 「美しい」。批判校訂版は Ś1, K2 に従い svarūpaṃ 「本性」と読むが、ここでは大多数の写本 (Ś2, K1, 3, 4 V1 B1-5 Da1 Dn1 D1-8 T1, 2 G1-3 M1-4) に従い surūpaṃ 「美しい」と読む。sva と su はシャーラーダ写本も含め、多くの写本で字体が非常に似ており、しばしば判読が難しい。svarūpaṃ と読む写本は、シャーラーダ写本二本のうち的一本とカシミール系デーヴァナーガリー写本四本のうち的一本のみであってすべての重要写本によって支持されているわけではなく、判読間違いによる誤記であると判断し、svarūpaṃ の読みを採用した。批判校訂版の読み通りであれば、25a-c は「その行動が非常に高尚な（高慢な）彼の魂が、常に安楽に培われた自身の本性とその体を離れるには多くの苦勞を要した」と訳すことができる。

⁹⁶MBh 8.67.25: tad asya dehī satataṃ sukhoditaṃ svarūpaṃ atyartham udāra karmaṇaḥ | pareṇa kṛcchreṇa śarīram atyajad grhaṃ maharddhīva sasaṅgam īsvaraḥ || 川尻訳 (p. 255) では、「かの素晴らしい行いをしたものの心は、絶え間なく本質的に尋常でなく喜びに湧いていた。[カルナの頭は] 裕福な主人が家族のいる家を離れる時のように、多大な困難をもって体を離れた」とされている。川尻氏は、男性単数主格の dehī 「体を有するもの」を sukhoditaṃ (中性単数主格もしくは対格) と同格でとって、また ab 句を一つのまとまりでとっているようであるが、これは文法的に不可能である。川尻訳では、c 句を独立した一文ととっているため主語に「カルナの頭」を補っているようであるが、a-c 句が一文をなし、dehī を主語、śarīram 「体」を目的語としてとるのが一番自然であるように思われる。

⁹⁷ドルパダ率いるパーンチャーラ族のことを指していると思われる。

⁹⁸vāsāmsi caivādudhuvur bhujāms ca. 直訳すると「衣服と腕を振り回した」となるが、腕を振り回すことで、衣服を振り回していると解釈した。

⁹⁹この詩節は何らかの祭式行為を想定した比喩であることは確かであるが、具体的にどの祭式を指しているのか、どのような意味を象徴しているのかは不明である。いわゆる「戦闘という祭式」(cf. Feller 2004: 253-293; 松濤 2006: 81-100) が終盤に差し掛かっていることを示している可能性がある。

矢という輝く光線によって敵軍を苦しめ¹⁰⁰, カルナという太陽は, アルジュナという強力な死神によってアスタ山に導かれた¹⁰¹. (31)

太陽が沈みゆく時, (空中の) 光を奪いながら進んでいくように, そのように (アルジュナの) 矢はカルナの生命を奪って飛んでいった. (32)

[カルナが総司令となった] 翌日の午後¹⁰², 御者の子 (カルナ) の頭は, 陛下 (ドリタラーシトラ), 戦闘においてアンジャリカによって切断され, その体もろとも [大地に] 落ちた. (33)

その矢は, 素早く, 軍勢のはるか上空で, かの敵たるカルナの頭を即座にその体もろともはねたのだった¹⁰³. (34)

サンジャヤは言った¹⁰⁴.

英雄カルナが大地に倒れ, 矢まみれになり, その四肢からは血が流れ出し, 大地に横たわっているのを見て, マドラ王 (シャリヤ) は, 戦旗の破壊された戦車でその場を離れた. (35)

カルナが殺されると, 戦闘で深傷を負い, 恐怖に駆られたカウラヴァ族たちは, アルジュナの美しく輝く大戦旗を幾度も確かめながら¹⁰⁵, 敗走していった. (36)

その行いは千眼の神 (インドラ) のそれに匹敵し, その顔は千の花弁を有する [蓮] のようである彼 (カルナ) の美しい頭部は, 日没時に千の光線を有する [太陽が大地に沈む] ように, 大地に落ちたのだった¹⁰⁶. (37)

4 結語

本書で訳出されている部分は『マハーバーラタ』の名場面の一つと言える箇所であり, その部分を読みたい本邦の読者の期待に応じて翻訳書を出版しようとする本書の意図は高く評価されるべきである. しかし, これまで見てきたように, 本書の翻訳には, 基本的なサンスクリット語の語形特定や統語理解における誤り, 原文の読み間違いや読み落としが著しく高頻度で見られ, さらに著者自身が基本的な文学的表象や『マハーバーラタ』の人物関係及び粗筋を理解していないがゆえの誤りも多く見られる. 解説部分についても『マハーバーラタ』や南アジア思想, 南アジア

¹⁰⁰あるいは「燃やし」.

¹⁰¹あるいは「カルナという太陽は... 沈められた」.

¹⁰²aparāhṇe parāhṇasya. このように同類の語を複数回用いながら, それぞれ異なる意味を表すような修辞法については, Sharma 1964: 160–161 を参照. カルナはクルクシェートラの戦いの第 16 日目にカウラヴァ軍の総司令となり, 第 17 日目に殺害される. 「翌日」というのは, Bowles 2008: 513 の理解に従い, ここではカルナにとって総司令官となった翌日として理解した.

¹⁰³原文では, 矢が軍勢のはるか上空を飛んでからカルナの首をはねたのか, 矢がカルナの首をはねてから軍勢のはるか上空を行ったのか, 両方解釈が可能である.

¹⁰⁴samjaya uvāca. 先行する詩節もサンジャヤの言葉であるため, この話者情報提示文は不要に思われるが, 全写本にこの文言があり, 批判校訂版のテキストにも組み込まれている. 『マハーバーラタ』では各章の初めに, 前章と話者が変わっていても, このように話者が提示されることを考えると, 第 34 詩節までの内容と 35–37 詩節までの内容とで何らかの区切りが存在しているのかもしれない. また, 第 30–34 詩節はアヌシュトブ韻律が使われているが, 第 35–37 詩節ではトリシュトブ韻律に切り替わっている. ただし, 韻律の切り替わりはこの章の中でも何回か起こっているが, 話者情報提示文は挿入されていない.

¹⁰⁵この部分の解釈としては, 敗走する戦士たちが, アルジュナと刃を交えることがないように, アルジュナがどこにいるのか常に確認しておくためにアルジュナの戦旗を何度も見るのか, アルジュナに追い立てられるがゆえにアルジュナの旗を何度も見る羽目になるのか, 二つの可能性がある. 上掲訳では前者の場合で理解した.

¹⁰⁶この詩節では, 「千」(sahasra) という言葉が三回用いられている.

ア文化について十分な知識と資料収集に基づいているとは言えず、本書で描かれているカルナとアルジュナの人物像や、『マハーバーラタ』の姿は川尻氏の主観的印象にすぎない。川尻氏の専門は『マハーバーラタ』ではないとはいえ、本書については、古代南アジアについての専門家として期待される、原典資料や先行研究に対する厳密さと誠実さの要求には達していないと言わざるを得ない。

一次文献および略号表

- Karṇabhāra*. See Sāstri 1912.
Kumārasaṃbhava. See Kale 1981.
Mānavadharmasāstra. See Olivelle 2005.
 MBh: *Mahābhārata*. See Sukthankar et al. 1927–1966.
Nāṭyaśāstra. See Kavi 1926–1934.
Ṛgveda. See Aufrecht 1877.
Sarvathīnā. See Trivedī 1898.

参考文献

- Adarkar, Aditya
 2001 *Karṇa in the Mahābhārata*. Ph.D. dissertation, the University of Chicago.
 2005 “Review: The Sanskrit Hero: Karṇa in Epic Mahābhārata by Kevin McGrath.” *Journal of Asian Studies* 64 (3): 783–785.
- Aufrecht, Theodor
 1877 *Die Hymnen des Ṛigveda*. 2 vols. Bonn: Adolph Marcus.
- Bedekar, V. M.
 1969 “Principles of Mahābhārata Textual Criticism: The Need for Restatement.” *Purāṇa* 11 (2): 210–228.
- Biardeau, Madeleine
 1968 “Some More Considerations about Textual Criticism.” *Purāṇa* 10: 115–123.
 1970a “Letter to the Editor.” *Purāṇa* 12: 180–181.
 1970b “The Story of Arjuna Kārtavīrya without Reconstruction.” *Purāṇa* 12: 286–303.
- Bigger, Andreas
 1998 *Balarāma im Mahābhārata: Seine Darstellung im Rahmen des Textes und seiner Entwicklung*. Wiesbaden: Harrosowitz Verlag.
- Böhtlingk, Otto & Rudolf Roth
 1855–1875 *Sanskrit-Wörterbuch*. Theil I–VII. St. Petersburg: Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften.
- Bowles, Adam
 2006 *Mahābhārata Book Eight: Karṇa, Volume One*. New York: New York University Press and JJC Foundation.
 2008 *Mahābhārata Book Eight: Karṇa, Volume Two*. New York: New York University Press and JJC Foundation.
- Brereton, Joel P.
 1982 “The Particle iva in Vedic Prose.” *Journal of American Oriental Society* 102 (3): 443–450.
- Brockington, John
 1985 “Sanskrit Epic Tradition III: Fashions in Formulae.” In R. N. Dandekar and P. D. Navathe (eds.), *Proceedings of the Fifth World Sanskrit Conference* (pp. 77–90). New Delhi: Rashtriya Sanskrit Sansthan.
 1998 *The Sanskrit Epics*. Leiden, Boston, Köln: Brill.
 2000 *Epic Threads: John Brockington on the Sanskrit Epics* (Greg Bailey and Mary Brockington eds.). Oxford, New York: Oxford University Press.
- Dandekar, R. N.
 1954 “The Mahābhārata: Origin and Growth.” *University of Ceylon Review* 12: 65–85.

- Debroy, Bibek
2015 *The Mahabharata, Volumes 1–10*. Haryana: Penguin Random House India.
- De Simini, Florinda
2017 “When Lachmann’s Method Meets the Dharma of Śiva: Common Errors, Scribal Interventions, and the Transmission of the Śivadharmā Corpus.” In Vincenzo Vergiani, Daniele Cuneo, and Camillo Alessio Formigatti (eds.), *Indic Manuscript Cultures through the Ages* (pp. 505–547). Berlin: De Gruyter.
- Dumézil, Georges
1954 “Karna et les Pāṇḍavas.” *Orientalia Suecana* 3(2): 60–66.
1958 *L’idéologie tripartite des Indo-Européens*. Bruxelles: Latomus. (松村一男訳『神々の構造—印欧語族三区分別イデオロギー』国文社 1987)
- Dunham, John
1991 “Manuscripts Used in the Critical Edition of the *Mahābhārata*: A Survey and Discussion.” In Arvind Sharma (ed.), *Essays on the Mahābhārata* (pp. 1–19). Leiden, New York, København, Köln: Brill.
- Feller, Danielle
2004 *The Sanskrit Epics’ Representation of Vedic Myths*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Fitzgerald, James L.
2001 “Making Yudhiṣṭhira the King: the Dialects and the Politics of Violence in the Mahābhārata.” In Danuta Stasik and John Brockington (eds.), *Indian Epic Traditions (Rocznik Orientalistyczny 54)* (pp. 63–92).
2003 “Review: The Many Voices of the Mahābhārata. Reviewed Work(s): Rethinking the Mahābhārata: A Reader’s Guide to the Education of the Dharma King by Alf Hiltebeitel.” *Journal of American Oriental Society* 123 (4): 803–818.
2006 “Negotiating the Shape of ‘Scripture’: New Perspectives on the Development and Growth of the *Mahābhārata* between the Empires.” In Patrick Olivelle (ed.), *Between the Empires: Society in India 300 bce to 400 ce* (pp. 257–286). Oxford, New York: Oxford University Press.
2010 “The Ethical Significance of Living by Gleaning (*uñchavṛtti*) in the Mahābhārata.” In Andreas Bigger, Rita Krajnc, Annemarie Mertens, Markus Schüpbachm, and Heinz Werner Wessler (eds.), *Release from Life — Release in Life: Indian Perspectives on Individual Liberation* (pp. 65–86). Bern, Berlin, Bruxelles, Frankfurt am Main, New York, Oxford, Wien: Peter Lang.
- Franco, Eli
2004 *The Spitzer Manuscript: The Oldest Philosophical Manuscript in Sanskrit*. Vols. I & II. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
2006 “Three Notes on the Spitzer Manuscript.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 49: 109–111.
- Greer, Patricia Meredith
2002 *Karna within the Net of the Mahābhārata: Reading the Itihāsa as Literature*. Ph.D. dissertation, University of Virginia.
- Grünendahl, Reinhold
1993a “Zur Klassifizierung von Mahābhārata-Handschriften.” In Reinhold Grünendahl, J-U. Hartmann, and P. Kieffer-Pülz (eds.), *Studien zur Indologie und Buddhismuskunde: Festgabe des Seminars für Indologie und Buddhismuskunde für Professor Dr. Heinz Bechert zum 60. Geburtstag am 26. Juni 1992* (pp. 101–130). Bonn: Indica et Tibetica Verlag.
1993b “Zur Textkritik des Nārāyaṇīya.” In Peter Schreiner (ed.), *Nārāyaṇīya-Studien* (pp. 30–74). Wiesbaden: Harrasowitz Verlag.
- Hacker, Paul
1961 “The Sāṅkhyization of the Emanation Doctrines: Shown in a Critical Analysis of Texts.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 5: 75–112.
- Hara, Minoru
1997 “A Note on the Phrases Not Shared by the Mahābhārata and Rāmāyaṇa.” *Indologica Taurinensia* 19/20: 147–168.
- Hiltebeitel, Alf
2007 “Krishna in the *Mahabharata*: The Death of Karna.” In Edwin F. Bryant (ed.), *Krishna: A Source-book* (pp. 23–76). New York: Oxford University Press.
2011 *Reading the Fifth Veda: Studies on the Mahābhārata—Essays by Alf Hiltebeitel, Volume 1* (Vishwa Alduri and Joydeep Bagchee eds.). Leiden, Boston: Brill.

- Johnson, W. J.
1998 *The Saupthikaparvan of the Mahābhārata: The Massacre at Night. Translated with an Introduction and Notes.* Oxford, New York: Oxford University Press.
- de Jong, J. W.
1975 “Recent Russian Publications on the Indian Epic.” *The Adyar Library Bulletin* 39: 1–42. (塚本啓祥訳『インド文化研究史論集：欧米のマハーバーラタと仏教の研究』平楽寺書店 pp. 20–56, 1996)
1985 “The Study of the Mahābhārata: A Brief Survey (Part II).” 『法華文化研究』11: 1–21. (塚本啓祥訳『インド文化研究史論集：欧米のマハーバーラタと仏教の研究』平楽寺書店 pp. 57–94, 1996)
- Kale, M. R.
1981 *Kumārasambhava of Kālidāsa, Cantos I–VIII: Edited with the Commentary of Mallinātha, a Literal English Translation, Notes and Introduction.* Seventh Edition. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Katz, Ruth Cecily
1990 *Arjuna in the Mahabharata: Where Krishna Is, There Is Victory.* Foreword by Daniel H. H. Ingalls. First Indian edition. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
1991 “The Saupthika Episode in the Structure of the Mahābhārata.” In Arvind Sharma (ed.), *Essays in the Mahābhārata* (pp. 130–149). Leiden, New York, København, Köln: Brill.
- Kavi, M. Ramakrishna
1926–1934 *Nāṭyaśāstra of Bharatamuni with the Commentary of Abhinavagupta.* Vols. 1–4. Baroda: Oriental Institute.
- Köhler, Frank
2014 “Karna and the Dharmik Evaluation of Character in the Mahābhārata.” *Indologica Taurinensia* 40: 1–20.
- Koskikallio, Patteri
1995 “Epic Descriptions of the Horse Sacrifice.” In Cezary Galewicz (ed.), *International Conference on Sanskrit and Related Studies, September 23–26, 1993 (Proceedings)* [pp. 165–178]. Cracow: The Enigma Press.
- Macdonell, Arthur Anthony
1897 *Vedic Mythology.* Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner. Reprint. Varanasi, Delhi: Indological Book House, 1971.
- Macdonell, Arthur Anthony & Arthur Berriedale Keith
1912 *Vedic Index of Names and Subjects.* Vols. I & II. London.
- Manabe, Tomohiro
2018 “On the Significance of the *Bhāgavatapurāṇa* in Madhusūdana Sarasvatī’s Advaita Doctrine.” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 66 (3): 1016–1021.
- Masson, J. L. & M. V. Patwardhan
1970 *Aesthetic Rapture: The Rasādhyāya of the Nāṭyaśāstra.* Vols. I–II. Poona: Deccan College, Postgraduate and Research Institute.
- Mayrhofer, Manfred
1992–2001 *Etymologisches Wörterbuch des Altindiarischen.* Bände I–III. Heidelberg: Vandenhoeck & Ruprecht.
- McGrath, Kevin
2004 *The Sanskrit Hero: Karna in Epic Mahābhārata.* Leiden: Brill.
2016 *Arjuna Pāṇḍava: The Double Hero in Epic Mahābhārata.* Hyderabad: Orient Blackswan.
- Meenakshi, K.
1983 *Epic Syntax.* New Delhi: Meharchand Lachhmandas.
- Mehendale, M. A. (ed.)
1997 *Mahābhārata—Cultural Index. Volume One (Fascicules 1–4).* Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Miller, Barbara Stoler
1985 “Karnaḥāra: The Trial of Karna.” *Journal of South Asian Literature* 20 (1-1): 47–56.

- Oberlies, Thomas
 1997 “Pali, Pāṇini, and “Popular” Sanskrit.” *Journal of the Pali Text Society* 23: 1–26.
 2003 *A Grammar of Epic Sanskrit*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Olivelle, Patrick
 2005 *Manu’s Code of Law: A Critical Edition and Translation of the Mānava-Dharmaśāstra*. Oxford, New York: Oxford University Press.
- Ong, Walter Jackson
 1982 *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. London, New York: Methuen. (桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店 1991)
- Panikkar, K. N.
 1990 “Mahābhārata Reflected in Performance.” In R. N. Dandekar (ed.), *The Mahābhārata Revisited: Papers Presented at the International Seminar on the Mahābhārata Organized by Sahitya Akademi at New Delhi on February 17–20, 1987* (pp. 193–200). New Delhi: Sahitya Akademi.
- Phillips-Rodriguez, Wendy J., Christopher J. Howe, & Heather. F. Windram
 2010 “Some Considerations about Bifurcation in Diagrams Representing the Written Transmission of the Mahābhārata.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 52/53: 29–43.
- Sāstrī, T. Ganapati
 1912 *The Madhyamavyāyoga, Dūtakāvya, Dūtaghaṭkacha, Karṇabhāra and Ūrubhanga of Bhāsa*. Trivandrum Sanskrit Series No. XXII. Trivandrum: Travancore Government Press.
- Schauffelberger, Gilles & Guy Vincent
 2013–2018 *Le Mahābhārata: Texte traduit du sanskrit*. Tomes I–VIII. Paris: Orizons.
- Schlingloff, Dieter
 1969 “The Oldest Extant Parvan-List of the Mahābhārata.” *Journal of the American Oriental Society* 89 (2): 334–338.
- Sellmer, Sven
 2015 *Formulaic Diction and Versification in the Mahābhārata*. Poznań: Adam Mickiewicz University Press.
- Sharma, Ram Karan
 1964 *Elements of Poetry in the Mahābhārata*. Berkeley, Los Angeles: University of California Press.
- Shulman, David Dean
 1985 *The King and the Clown in South Indian Myth and Poetry*. Princeton: Princeton University Press.
- von Simson, Georg
 1984 “The Mythic Background of the Mahābhārata.” *Indologia Taurinensia* 12: 191–223.
 2011 *Mahābhārata: Die grosse Erzählung von den Bhāratas*. Berlin: Insel Verlag.
- Sukthankar, S. Vishnu, S. K. Belvalkar et al.
 1927–1966 *Mahābhārata: For the First Time Critically Edited*. 19 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Sullivan, Bruce M.
 1990 *Kṛṣṇa Dvaipāyana Vyāsa and the Mahābhārata*. Leiden, New York, København, Köln: Brill.
 2016 “An Overview of Mahābhārata Scholarship: A Perspective on the State of the Field.” *Religion Compass* 10/7: 165–175.
- Sutton, Nicholas
 1997 “Aśoka and Yudhiṣṭhira: A Historical Setting for the Ideological Tensions of the Mahābhārata?” *Religion* 27: 333–341.

- Takahashi, Kenji
 2018 “*harṣasthānasahasrāṇi bhayasthānaśatāni ca* ‘Hundreds and Thousands of Occasions for Joy and Fear’: A Study of Stock Phrases in the Indian Great Epic *Mahābhārata*.” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 66 (3): 980–984.
 2021a “On the Narrative Structure of the *Vārṣṇeyādhyātma* (*Mahābhārata* 12.203–210).” *Machikane-yama Ronsō, Philosophy* 55: 57–70.
 2021b “The Dharma of Gleaners in the *Umāmaheśvarasaṃvāda*: Studies on the Śivadharmā and the *Mahābhārata* 2.” In Florinda De Simini and Csaba Kiss (eds.), *Śivadharmāmṛta: Essays on the Śivadharmā and Its Network* (pp. 255–283). Napoli: Unior Press.
 2023 “The ‘Mental’ (Mānasa) Self and Mānasa the Creator in the *Bhṛgubharadvājasamvāda* (*Mahābhārata* 12.175–185).” *Journal of Indological Studies* 34/35: 15–37.
- Tarkavachaspati, Taranatha
 1873 *Vācaspatya, Brhatsaṃskṛtābhidhāna: Vachaspatya, A Comprehensive Sanskrit Dictionary*. Calcutta: Kavyaparakasha Press.
- Thite, G. U. (ed.)
 2019 *Mahābhārata—Cultural Index. Volume Three. Fascicule 2*. Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Trautmann, Thomas R.
 2015 *Elephants and Kings: An Environmental History*. Chicago, London: The University of Chicago Press.
- Trivedī, Kamalāśaṅkara Prādaśaṅkara
 1898 *The Bhaṭṭi-Kāvya or Rāvaṇavadha Composed by Śrī Bhaṭṭi: Edited with the Commentary of Mallinātha and with Critical and Explanatory Notes*. 2 vols. Bombay: Government Central Book Depôt.
- Tubb, Gary A.
 1991 “*Śāntarasa* in the *Mahābhārata*.” In Arvind Sharma (ed.), *Essays on the Mahābhārata* (pp. 171–203). Leiden, New York, København, Köln: Brill.
- Viethsen, Andreas
 2008 *Krishna Vāsudeva und die Schlacht auf dem Kurukṣetra: Eine textgeschichtliche Untersuchung zu den Büchern 6–11 des altindischen Epos Mahābhārata*. Hamburg: Verlag Dr. Kovač.
- Whitaker, Jarrod L.
 2000 “Divine Weapons and *Tejas* in the Two Indian Epics.” *Indo-Iranian Journal* 43 (2): 87–113
- 赤松明彦
 2008 『『バガヴァッド・ギーター』—神に人の苦悩は理解できるのか?』岩波書店.
 2018 『インド哲学 10 講』岩波書店.
- 粟屋利江
 2023 「南アジア歴史研究における感情をめぐる：予備的サーヴェイ」『現代思想 2023 年 12 月号 特集=感情史』所収 (pp. 67–75) 青土社.
- 石原美里
 2023 『邦訳マハーバーラタ：マハーバーラタ原典抄訳集：寡妃の巻』千頌夜舎.
- 伊藤博明
 2015 「聖なるテキストを編集する—新約聖書」明星聖子・納富信留編『テキストとは何か—編集文献学入門』所収 (pp. 49–78) 慶應義塾大学出版会.
- 沖田瑞穂
 2019 『マハーバーラタ入門—インド神話の世界』勉誠出版.
- 梶原三恵子
 2021 『古代インドの入門儀礼』法蔵館.
- 上村勝彦
 1990 『インド古典演劇論における美的経験—Abhinavagupta の *rasa* 論』東京大学東洋文化研究所紀要別冊.
 1992 『バガヴァッド・ギーター』岩波書店.
 1999 『インド古典詩論研究—アーナンダヴァルダナの *dhvani* 論』東京大学東洋文化研究所紀要別冊.
 2002–2005 『原典訳マハーバーラタ』1–8 巻, 筑摩書房.

- 川尻道哉
2022 『カルナとアルジュナ—『マハーバーラタ』の英雄譚を読む』 勉誠社.
- 川村悠人
2023 「神器と魔法の古代書」『ユリイカ 特集=奇書の世界』所収 (pp. 256–263) 青土社.
- 後藤敏文
1991 「Aśvin-と Nāsatya-」『印度学仏教学研究』39 (2): 977–982.
2016 「ヴァルウナ (Vāruṇa)」『世界神話伝説大事典』所収 (p. 508) 勉誠出版.
- 高橋健二
2023 「『マハーバーラタ』の神話的構造をめぐって—沖田瑞穂著『マハーバーラタ, 聖性と戦闘と豊穡』みずき書林 (2020) 書評論文」『南アジア古典学』18: 121–145.
2024 「『マハーバーラタ』インド南方伝承に関する研究動向: Mahadevan 説に関する覚書」梶原三恵子編『インド語インド文学拾遺』所収 (pp. 15–30) 東京大学インド語インド文学研究室.
- 辻直四郎
1973 『サンスクリット文学史』岩波書店.
- 辻春樹
forthcoming 「古代インドにおける感情研究の最新動向: Maria Heim, Chakravarthi Ram-Prasad, Roy Tzohar eds. 2021. *The Bloomsbury Research Handbook of Emotions in Classical Indian Philosophy*, London: Bloomsbury Academic 書評論文」『比較論理学研究』21.
- 納富信留
2015 「西洋古典テキストの伝承と校訂—プラトン『ポリテΙΑ (国家)』」明星聖子・納富信留編『テキストとは何か—編集文献学入門』所収 (pp. 3–24) 慶應義塾大学出版会.
- 野部了衆
1994 「戯曲『Kāṇabhāra・カルナの苦勞』とその周辺 (1)」『聖徳学園女子短期大学紀要』22: 1–17.
- 早島鏡正・高崎直道・原實・前田専學
1982 『インド思想史』東京大学出版会.
- 原實
1979 『古代インドの苦行』春秋社.
1997 「Tvam—古典梵語二人称不敬代名詞」『インド思想史研究』9: 78–92.
2013 「「真実」—梵語合成語 satya-kriyā をめぐりて—」龍谷大学現代インド研究センター.
- 前川輝光
2006 『マハーバーラタの世界』めこん.
- 前田専學
2016 『インド思想入門: ヴェーダとウパニシャッド』春秋社.
- 松濤誠達
2006 『古代インドの宗教とシンボリズム』大正大学出版会.
- 宮元啓一
1994 「インドにおける輪廻と差別」山崎元一・佐藤正哲編『叢書カースト制度と被差別民 第一巻 歴史・思想・構造』所収 (pp. 71–83) 明石書店.
- 山崎元一
1994 「古代インドの差別と中世への展開」山崎元一・佐藤正哲編『叢書カースト制度と被差別民 第一巻 歴史・思想・構造』所収 (pp. 55–70) 明石書店.
- 吉水清孝
2022 「バラモンの学問体系—十四または十八の「知の居所」(vidyāsthāna)」藤井正人・手嶋英貴編『ブラフマニズムとヒンドゥイズム 1. 古代・中世インドの社会と思想』所収 (pp. 355–413) 法蔵館.

(たかはし けんじ・かわむら ゆうと, 東京大学・広島大学 [インド文学・インド哲学])

Karṇa and Arjuna, and the Future of *Mahābhārata* Studies: A Review of
Michiya Kawajiri, *Karṇa and Arjuna: Reading the Heroic Tales of the
Mahābhārata*. Tokyo: Benseisha, 2022.

TAKAHASHI Kenji and KAWAMURA Yūto

Kawajiri, M. *Karṇa and Arjuna: Reading the Heroic Tales of the Mahābhārata*, 2022 is a recent Japanese translation of Chapters 49–69 of the eighth book (*Karṇaparvan*) of the *Mahābhārata* with an introduction to the epic, the stories surrounding Karṇa and Arjuna, and their cultural backgrounds. The *Mahābhārata* was translated into Japanese up to 8.49.24 by the late Katsuhiko Kamimura, whose death in 2003 unfortunately brought the translation to an abrupt end; the remainder of the epic has been left untranslated since then. Kawajiri's book is intended as a continuation of Kamimura's unfinished work.

Although Kawajiri's determination to publish an accessible Japanese translation of the *Mahābhārata* is commendable, the book contains multiple imprecise descriptions and sloppy translations, causing the reader unnecessary confusion. The present paper discusses the ungrounded arguments advanced in the introductory part of the book and offers our new annotated translations for Chapters 66–67. In doing so, the present work aims to set an academic standard for philological research in Sanskrit literature and envision the future of studying this great epic.